柿田月田遺跡・清水経塚古墳

2009．3
岐阜県可児市教育委員会

柿田月田遺跡・清水経塚古墳

2009・3
岐阜県可児市教育委員会

例　　言

1．本書は、柿田月田遺跡（可児市柿田字月田）、清水経塚古墳（可児市下恵土字清水）における緊急発掘調査報告書である。各調査の原因と経過はそれぞれ本文中に記した。

2．試掘調査・本発掘調査の現場作業は平成17年度末から平成18年度半ばに実施し、整理・報告書刊行の作業はその後継続的に平成19年度まで実施した。尚、現場調査及び整理作業は、いずれも可児市教育委員会が直営で実施した。

3．発掘調査の体制は以下のとおりである。

教育長　　井戸　英彦
教育部長　　武藤　隆典（平成17年度）　大澤　正幸（平成18・19年度）
文化振興課長　　山口　　哲
文化財係長　　長瀬　治義（平成17～19年度）
調査担当者　　吉田　正人（平成17～19年度）　松本　茂生
調査補助員　　成尾　孝子　本田　博志　水野テツ子
作　業　員　　飯田美代子　伊佐治　誠　可児　定夫　前田　友子　山口　正則

4．本編の編集・執筆、掲載写真の選択とレイアウト、遺構関係の図面トレース及びレイアウトは　松本茂生　が行った。また、遺物の整理及び実測、トレースは　成尾孝子　と本田博志　が、一部遺物の実測及び撮影を　長江真和　が担当している。

5．発掘調査に当たっては、次の方・関係機関にご協力を賜りました。記して謝意を表します。

伊佐次　静雄　積水ハウジング株式会社名古屋シャーメゾン支店　（敬称略　順不同）

6．調査記録及び出土遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

7．報告書に掲載されている地図及びそれに関連した図版に関しては、可児市長の承認を得て、同市所管の都市計画図を使用して得たものである。

目　　次

例　言
目　次

第１章　柿田月田遺跡
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　遺跡の立地と環境 …… 2
第３節　遺構と遺物 …… 5
第４節　まとめ …… 15

写真図版 …… 16

第２章　清水経塚古墳
第１節　調査の経緯 …… 24
第２節　遺跡の立地と環境 …… 28
第３節　遺構と遺物 …… 28
第４節　まとめ …… 38

写真図版 …… 39
報告書抄録

第１章　柿田月田遺跡

第1節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

柿田月田遺跡の発掘調査は集合住宅建設に伴うもので、西側に隣接する「柿田遺跡」に関連した遺構が出土する可能性が高いと判断し、その有無や範囲を確認するための試掘調査を行った。期間は平成18年3月28日から31日まで、95平方メートルの面積について調査を実施した。

対象となった区画内の集合住宅建設予定の場所に東西・南北方向のトレンチを設定。重機（バックホー）による荒掘りの後、人力による精査を行っている。

南北方向のトレンチ（幅3m×長さ21m）からは遺構は検出されなかったが、東西のトレンチ（幅3m×長さ10.6m）からは、そのほぼ中央の位置から幅1.5～2mの溝と思われる遺構が検出された。また、遺構面の直上に当たる層から土師器片が多数出土した。明確な遺構が出土したことから、引き続き本発掘調査へと移行することになった。

調査は、試掘・本発掘調査ともに、松本茂生が担当した。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは以下のとおりである。

事業者発	平成18年3月22日		市教委宛	試掘調査の申請
市教委発	平成18年3月31日	教文振第179号	県教委宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成18年4月10日	教文振第15号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成18年5月19日	教文振第16号	県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成21年1月9日	教文振第7号の6	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成21年1月15日	社文第12号の31	市教委宛	出土品譲与通知

２．本発掘調査の経緯と経過

試掘調査の結果を受けて、引き続き検出された溝跡の調査を実施。期間は平成18年4月1日から3日までで、約160平方メートルの面積について調査を実施した。

南北・東西方向に設定されていたトレンチを北東方向に拡張し、試掘時点で検出された溝跡を今回開発を行う範囲の東端まで追った。拡張部分については、本来であれば遺構面を確認しながら慎重に行うべきであるが、住宅建築の施行開始時期が迫っていたこともあり、遺物包含層の直上にあたる層まで重機による荒掘りを行い、遺物包含層及び溝跡の内部については人夫による手作業で行った。

検出された溝跡は、内部に複数の堆積した流土の層が折り重なっており、土師器を中心とした土器の破片、流木等が多数出土した。溝内部に人工的な加工の痕跡を確認できなかったことから、用水として人為的に作られたものではなく、自然に形成された流路ではないかと思われる。また、出土した土師器の年代が古墳時代前半のものと思われることから、遺構自体の年代も同じ頃であると考えられる。

関係法令等に基づく本発掘調査の諸手続きは以下のとおりである。

事業者発	平成18年4月1日	教文振第29号	県教委宛	埋蔵文化財発掘の届け出
県教委発	平成18年4月1日	社文第12号の32	事業者宛	発掘調査指示の通知
市教委発	平成18年4月1日	教文振第30号	県教委宛	発掘調査着手の報告
県教委発	平成18年4月3日	社文第247号	市教委宛	受理の通知
市教委発	平成18年5月19日	教文振第31号	事業者宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成18年5月19日	教文振第32号	県教委宛	発掘調査終了の報告
市教委発	平成18年5月19日	教文振第33号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成18年5月19日	教文振第34号	県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成18年5月31日	教文振第54号	事業者宛	遺跡発見の通知
県教委発	平成18年6月6日	社文第58号の7	市教委宛	遺跡の発見について（通知）
市教委発	平成21年1月9日	教文振第7号の7	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成21年1月15日	社文第12号の32	市教委宛	出土品譲与通知

第２節　遺跡の立地と環境

１．立地と環境

可児市の北東部の端に位置し、御嵩町に隣接している。北側を流れる可児川により形成された沖積平野と南側にある浅間丘陵地の麓に広がる扇状地上に存在する。沖積平野の北側には御嶽山地が連なり、南側の浅間丘陵地とはさまれるような形で、緩やかな勾配の平野が広がっている。

可児市から御嵩町にかけてのこの一帯は、古代において美濃国可児郡に属していたとされ、7世紀後半には行政区画として存在していたことが明らかになっている。「郡家」、「駅家」と呼ばれた郷が存在したことから、当時の行政拠点が置かれていた可能性が考えられ、現在の御嵩町字顔戸が「郡家郷」に比定されることから、この地域に、古代の幹線道路である東山道が通っていたことが想定される。

調査区の北側の御嶽町内には平成9年に調査された「顔戸南遺跡」が存在し、古墳時代から中世にかけての集落跡、水田、道路状遺構（古代）が発見されている。さらに北側の可児川対岸には「金ヶ崎遺跡」が存在し、平成12年度の調査により、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などと並んで墳丘墓が発見され、「顔戸南遺跡」に関連した墓域であったと考えられている。

調査区西側では、平成11～13年にかけて東海環状自動車道可児御嵩インターチェンジ建設の際に行われた発掘調査によって「柿田遺跡」が発見された。この遺跡からは集落跡、旧河道跡、水田等の遺構が検出され、縄文～近現代にかけて各時代の様相を確認することできる様々な遺物が出土している。北側に存在する「顔戸南遺跡」と一体の遺跡であると考えられ、特に弥生から古墳時代にかけての集落や水田の様子を知る上で非常に貴重な成果となった。

南側には、「神崎山古墳」、「前山2号墳」、「杉ヶ洞古墳群」（いずれも古墳後期）等が存在し、古墳時代を中心に当時のこの地域の様子を窺い知ることができる様々な遺跡が確認されている。

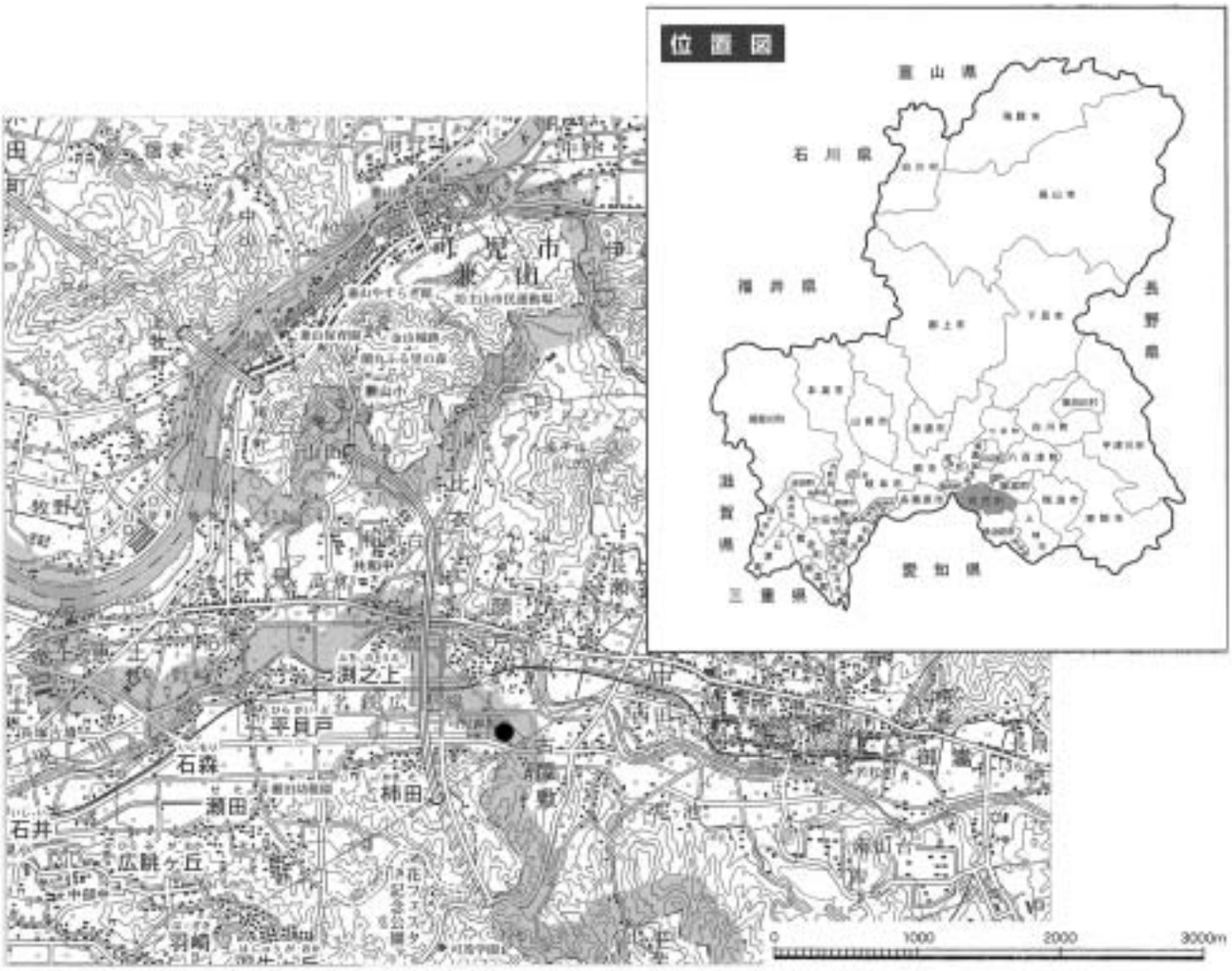


図１　調査場所の位置図及び周辺

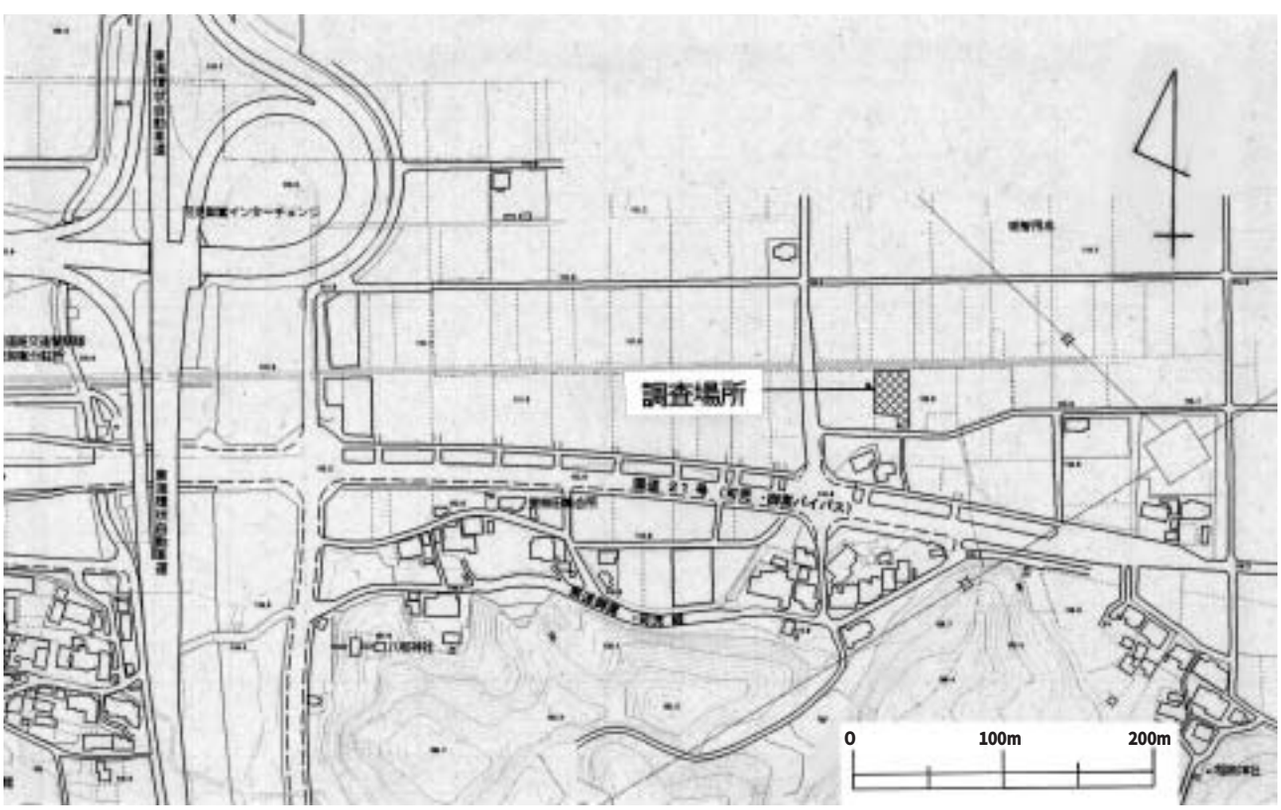


図２　調査場所周辺地形図

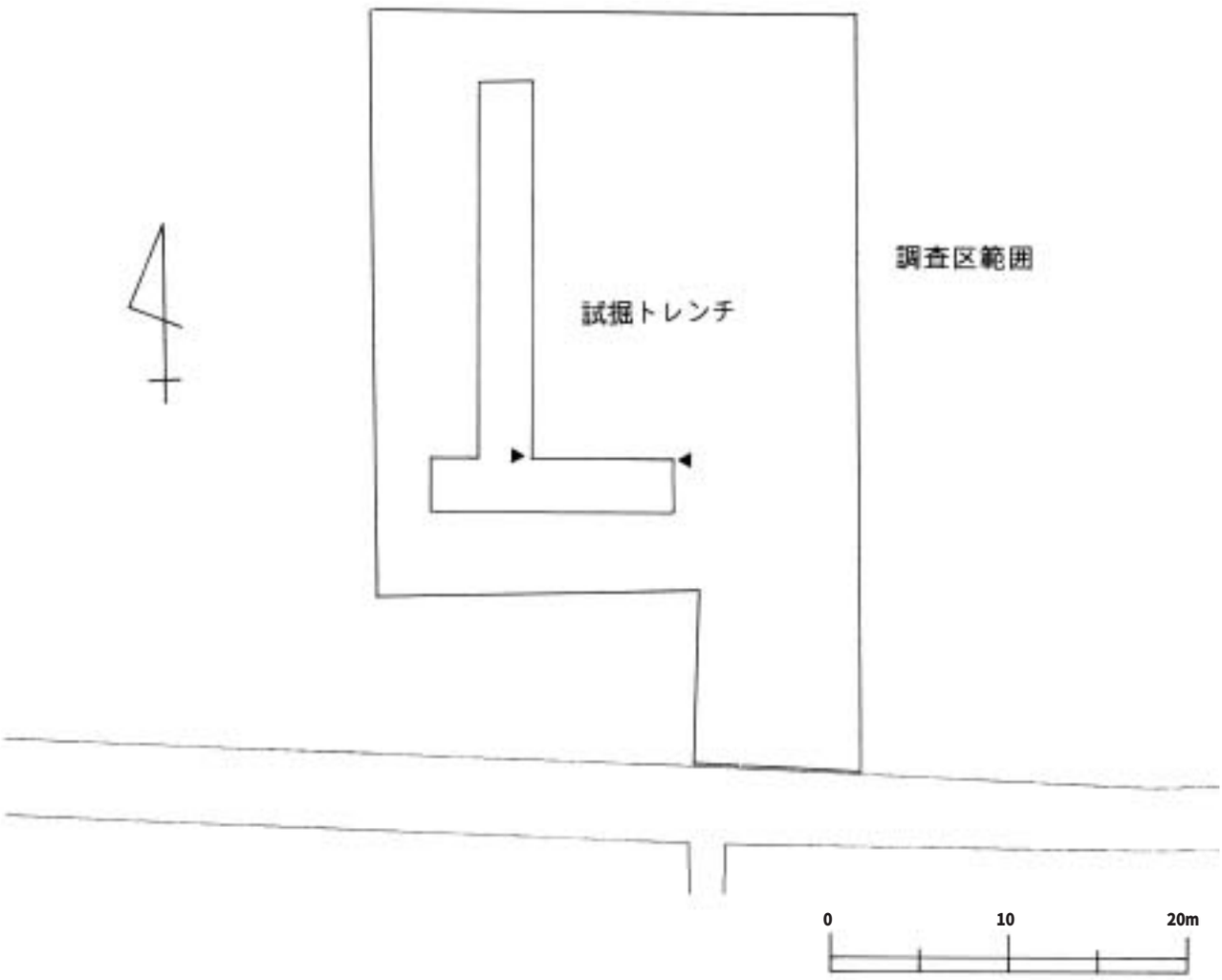
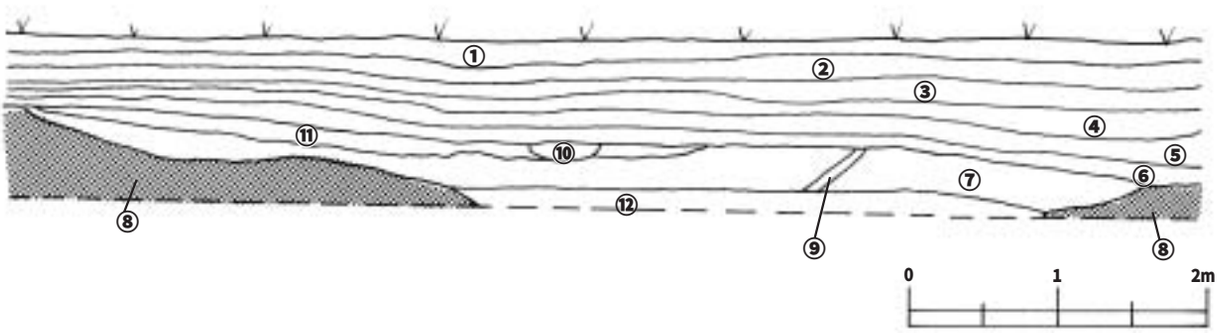


図３　試掘トレンチ設定図



①黒褐色粘質土　やわらかい　しまる（水田耕作土）
②青灰色粘質土　やわらかい　しまる
③暗褐色粘質土　やわらかい　しまる
④茶褐色粘質土　しまる　砂粒含む
⑤灰褐色粘質土　しまる　炭含む
⑥黄褐色粘質土　固い　しまる　炭含む
⑦黒褐色砂質土　やわらかい　しまる　鉄分含む
⑧淡青灰色粘質土　固い　しまる（地山）
⑨黄褐色砂層　やわらかい　小石含む
⑩黒青灰色砂質土　しまる
⑪灰褐色粘質土　固い　しまる　炭含む
⑫黄褐色砂層　細かく互層化

図４　試掘トレンチ（東西）内土層図

第３節　遺構と遺物

１．層　序

調査対象区域は、北側を流れる可児川により形成された沖積平野と南側にある浅間丘陵地の麓に広がる扇状地に挟まれるように存在する。周辺区域も含めて長らく水田として利用されてきており、現況地表面より50～70cmほど下までは、水田の耕作土及び敷土である。（図4の①～④）また⑤及び⑥の層は旧地表と思われ、須恵器や山茶碗、施釉陶器の破片を含む中世の遺物包含層である。図4の⑦以降は、今回検出された自然流路（ＮＲ）内の堆積層で、主に砂礫層からなるが、あいだに粘質土の層が挟まることで層状になっており、流路内で流れに伴う堆積の変化があったことが観察される。

なお、図4の⑧の層は地山で淡青灰色粘質土である。西側に隣接する「柿田遺跡」の調査結果と比較して、その層相が南側の扇状地性堆積層の特徴と合致することから、北側の沖積平野ではなく、南側の扇状地に属すると思われる。

２．遺　構

調査の対象となった区画は、その西側に「柿田遺跡」（岐阜県教育文化財団が調査を実施）の存在が確認されており、それに関連した遺跡が出土する可能性高いと考えられた。試掘の段階で、調査区内に東西・南北方向の2本の試掘坑（トレンチ）を設定し（図3）、重機による掘削を行ったところ、南北方向のトレンチ内部からは遺構と思われる痕跡は確認されなかった。

続いて掘削を行った東西方向のトレンチ内部からは、溝状の痕跡を確認した。（図版1）その形状は、北東から南西に向かって、調査区内を斜めに横切るような形をしており、その幅は2～3mで、遺構の直上の層からは土師器片が出土した。そこでまず、トレンチ内の遺溝の状況を確認するため、その内部を掘り進めたところ、砂質の堆積の中に遺物（土師器片）を含む層が存在し、溝跡の底部にあたる地山上の4ヶ所から、器形を特定することが可能な土師器が計4個出土した。（図5の1～3）

この段階で、出土した遺構がかつてこの区域に存在していた自然流路（NR）でないかという結論に至ったため、調査区内のどの辺りまで流路が続いているのかを確認するため、トレンチを北東方向に拡張（東へ約4m、南へ約9m）した。（図5）

流路の痕跡を追うと、調査範囲の東端まで達しており、最も幅の広い部分で約5mにも達する大きな流れの跡であることが確認できた。（図5・図版2）深さは、最も浅い部分で約50cm、最も深い部分では1.3mほどに達した。

東端の壁（図6、図版3）の土層を観察したところ、流路内は砂質土（砂礫）の層と粘質土の層が重なり合うように堆積しており、それが幾つかのブロックに分かれていることがわかった。またＮＲの底面とその上層（図6の㉒～㉔）、ＮＲ南側の岸（図6の⑫、⑬）に遺物を多量に含む砂礫層が存在したことから、ＮＲの流域一帯に人間が生活していた領域が存在し、当時使用されていた道具類がＮＲ内に投棄されていた可能性が高いと判断した。

なお、NR内からは土師器のほかに、流れ込んだ流木と思われる木片も出土しているが、NR自体を人工的に加工したと思われる痕跡は確認できず、柿田遺跡や顔戸南遺跡などの流路で

見られた堰や護岸といった水制遺構が作られた痕跡は発見されなかった。

今回検出された自然流路は、内部の土層の重なり方を観察すると、概ね発見時の位置と方向（北東－南西の方向）を保っており、ある程度の幅で南北に流れる方向を変えながら、一定の期間この場所に存在したと考えられる。北側を流れる可児川の支流の1つとして、その流れに影響されながら、幅や流れる方向が何度か変化し、その度ごとにＮＲ内部に何層もの異なった性質の土砂による堆積ができたと考えられる。

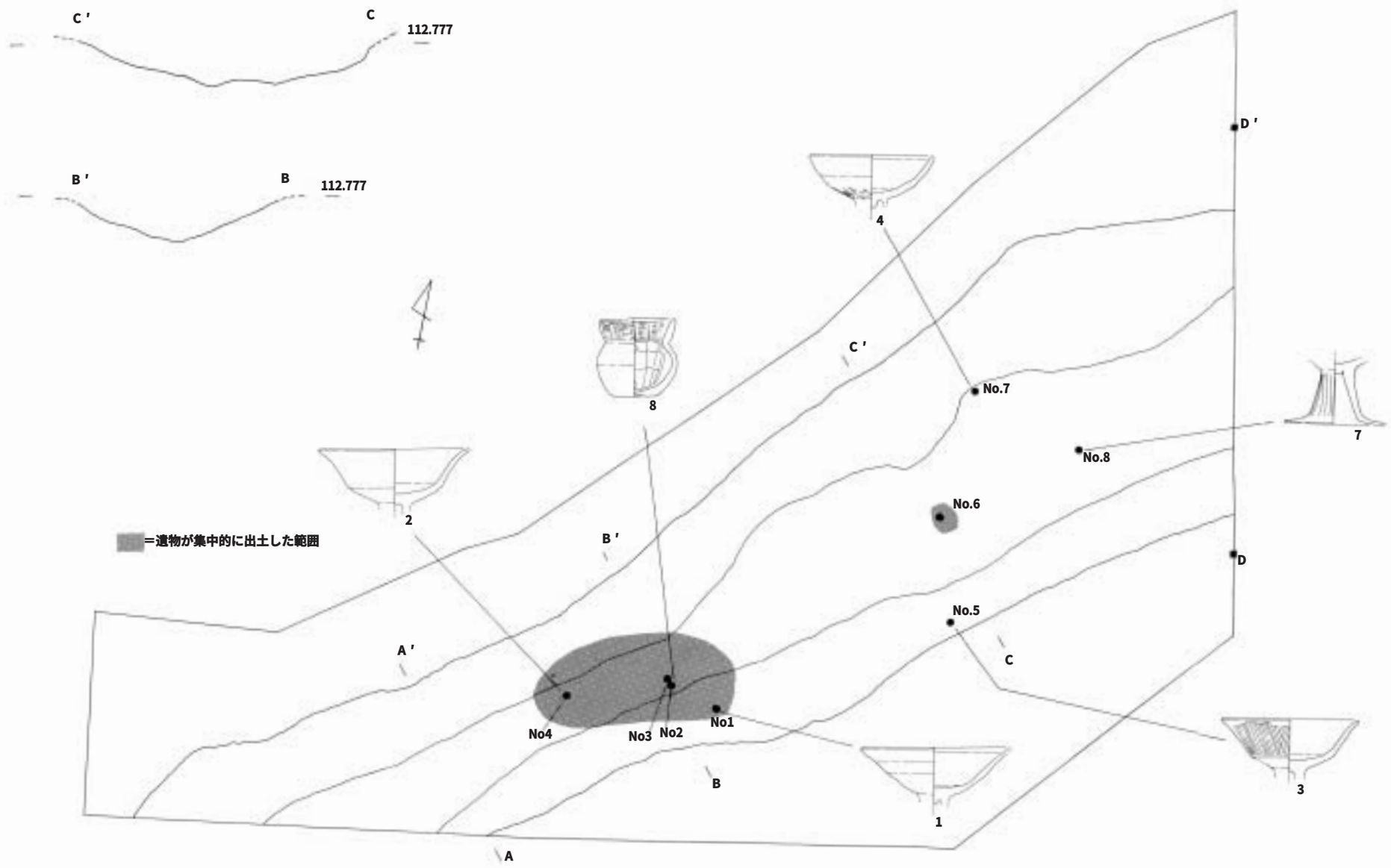
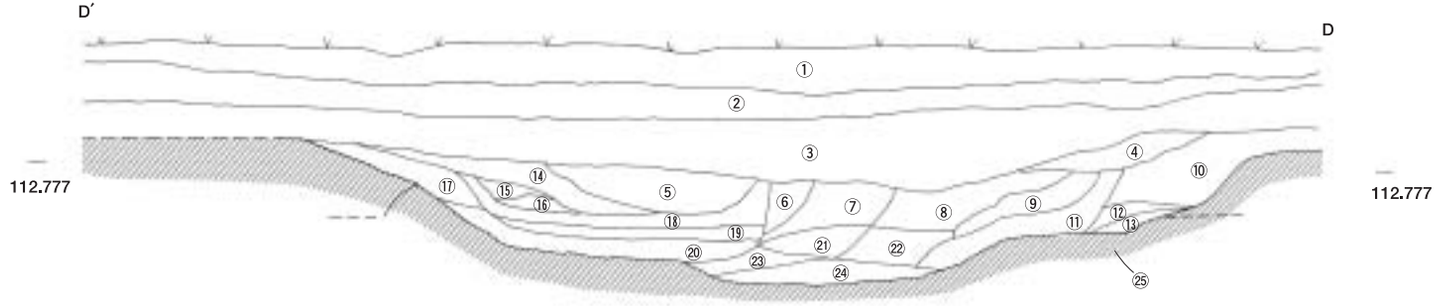
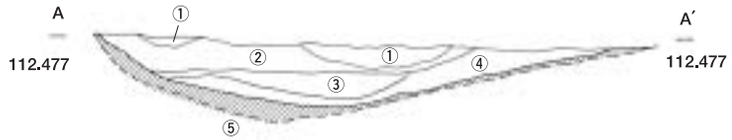


図５　調査区遺構平面図及び遺物出土地点（遺物s=1/6）



①黒褐色粘質土　やわらかい　しまる（水田耕作土）
②青灰色粘質土　やわらかい　しまる
③暗褐色粘質土　やわらかい　しまる
④暗褐色粘質土　しまる　小石多含む
⑤黄褐色砂層　細かく互層化
⑥黒褐色粘質土　しまる
⑦暗褐色粘質土　しまる
⑧黄色砂層　細かく互層化
⑨黒褐色砂質土　やわらかい
⑩灰褐色粘質土　しまる
⑪暗青灰色粘質土　しまる
⑫暗青灰色砂質土　遺物含む
⑬砂礫層　遺物含む
⑭黒褐色粘質土　しまる
⑮黒褐色砂質土　やわらかい
⑯砂礫層
⑰黒褐色粘質土　しまる
⑱黒褐色砂質土　やわらかい　互層化
⑲黄色砂層　互層化
⑳砂礫層　互層状をなす
㉑黒青灰色粘質土　しまる
㉒黄褐色砂層　細かく互層化
㉓黒青灰色砂質土　やわらかい　遺物含む
㉔砂礫層　遺物含む
㉕淡青灰色粘質土　固い　しまる（地山）



①黒褐色粘質土　しまる
②黄褐色砂層　細かく互層化（㉒と同じ）
③黒青灰色砂質土　やわらかい　遺物含む（㉓と同じ）
④砂礫層　遺物含む（㉔と同じ）
⑤淡青灰色粘質土　固い　しまる（地山）

0　1　2m

図６　調査区土層図

３．遺　物

試掘調査で掘削した南北・東西のトレンチからは、須恵器、山茶碗、施釉陶器の破片が出土した。現代の陶片やプラスチック製品なども若干見られたが、調査の直前まで水田として使われていたこともあり、その量はほんのわずかであった。

須恵器・山茶碗などの遺物は、東西・南北のトレンチ合わせて60点ほど出土している。ほとんどが砕片で復元可能なものは少なく、図9の38と39（共に山茶碗）は比較的残りがよく図化を行った。時期は12世紀中～後半にかけてのものと思われる。

また、東西トレンチ内の自然流路（ＮＲ）の直上にあたる層（図4の⑤及び⑥層、図6の③層）及びＮＲ内部から土師器片と流木と思われる木片が出土している。図6の③層はＮＲに接しており、出土した計8点の土師器片は基本的に砕片で、甕（体部）、甕の口縁（図8の26）、小型壷（図9の37）、高坏の坏部などがあった。

今回の調査で主に遺物が出土したのは、ＮＲの底面及びその直上の砂礫層、ＮＲの南端部となる。調査中に出土した遺物の総数は453点であるが、上部層で出土した比較的新しい時期（古代・中世）の遺物を除くと、そのほとんどがＮＲの内部で出土したことになる。さらに言えば、その大半が図6の㉒、㉓、㉔の３つの砂礫層（川底の堆積）の内部で見つかっており、約3分の2（303点）がこの層から出土している。

内容としては、高坏の坏部、脚部、甕の体部及び底部、口縁部（く字型のものが多い）、碗、壷、小型壷の口縁部及び体部などがあげられるが、砕片であることから器形を復元できたものは一部である。

ＮＲに関しては、まずトレンチ内部の範囲を掘り下げる作業を行ったところ、底に近い層（図6の㉒～㉔）を中心に、土師器の破片が多数出土した。ＮＲの内部は砂礫層と粘質層が交互に堆積しており、川の流れによって運ばれ堆積した砂礫層の内部に、投棄されたと思われる土師器の破片が溜まったことにより、このような形で遺物が残ったと考えられる。

掘り下げた流路の範囲のほぼ中央から、器形を確認できる状態の土師器4点が出土した。出土地点は底部4ヶ所で（図5の№1～4の位置）、高坏の坏部分3点と小型壷1点の計4点であった。（図7の1、2、8。№3の位置で出土した高坏の坏部分は図化していない。）

個別に詳細を述べると、出土位置№1で出土した高坏（図7の1）は坏の部分のみであるがほぼ完形で（碗形）、口径15.6cm、残存高約5.7cmを図る。表面の調整は磨耗しており、坏の内外に黒い焼け焦げの痕が残る。出土時の状況は底部に向かってお碗を伏せたような状態であった。（図版4）時期は、川合遺跡群における前Ⅳ期、松河戸Ⅰ式である4世紀後半を想定する。

出土位置№4で出土した高坏（図7の2）も図7の1と同様に伏せたような状態で出土しており（図版4）、こちらは有段高坏で、口径12cm、残存高約8cmを図る。口縁部外側の一部が黒く焼けている。（図版5）時期は川合遺跡群前Ⅴ期、松河戸Ⅱ式の5世紀前半である。なお、№3の位置で出土した高坏は坏の底部のみで図化を行っていないが、高坏（図7の2）とほぼ同じ時期のものと考えられる。

出土位置№2の小型壷（図7の8）は口径7.9cm、器高8.2cmでほぼ完形であった（図版4）。時期は5世紀後半と考えられる。（図版7）

その後、ＮＲの範囲を北東方向に拡張した。拡張後に検出されたＮＲの全体を底部まで掘り下げた結果、その底部からも計4ヶ所から土師器が出土した。図5の№5～8の位置でそれぞ

れ高坏の坏部や脚部が堆積した砂礫層に埋もれるように残されていた。

出土位置№5（図版7の3）と№7（図版7の4）は共に高坏の坏部で、この2点も底面に内側を向けた形で出土している（図版4）。

図7の3の高坏は口径14.5cm、残存高6.3cm、有段高坏で外面へラミガキが施され、一部に焼けた跡が残る。時期は川合遺跡群前Ⅴ期（松河戸Ⅱ式）にあたる5世紀前半と思われる。図7の4の高坏は口径12.9cm、残存高4.8cm、残存部分から判断するに碗形しており、底部内面に板ナデ調整が見られる。時期は川合遺跡群前Ⅴ期（松河戸Ⅱ式）の5世紀前～中ぐらいと思われる。（共に図版5）

出土位置№8からは高坏の脚部が出土（図7の7、図版6）。脚端部径10.7cm、残存高7cm、外面にへラミガキが見られる。時期は5世紀前半である。なお、№6に関しては12cm程の川原石が出土しているが、洗浄後観察したところ、道具として加工・使用された痕跡を確認することができなかった。

また図5に示した出土位置№1～4の周辺部および№6付近（スクリーントーン部分）からは、底部（地山）直上の堆積層（図6の㉒～㉔）からまとまった量の土師器片が出土。川底の中央部分でもあり、投棄された遺物が溜まりやすい環境があったと考えられる。

その他のＮＲ内部で出土した遺物を含めて観察した結果、約4世紀後半の頃にはＮＲがこの場所にあったと想定され、少なくとも5世紀後半まではＮＲ内に土師器等の投棄が行われていたと考えられる。

参考文献

可児町教育委員会　『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』　1976
可児市教育委員会　『川合遺跡群』　1994
可児市　『可児市史』第1巻　通史編　考古・文化財　2005
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『廻間遺跡』　1990
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『松河戸遺跡』　1994
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『志賀公園遺跡』　2001
赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』
第２号　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　2001
財団法人岐阜県文化財保護センター　『顔戸南遺跡』　2000
財団法人岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005

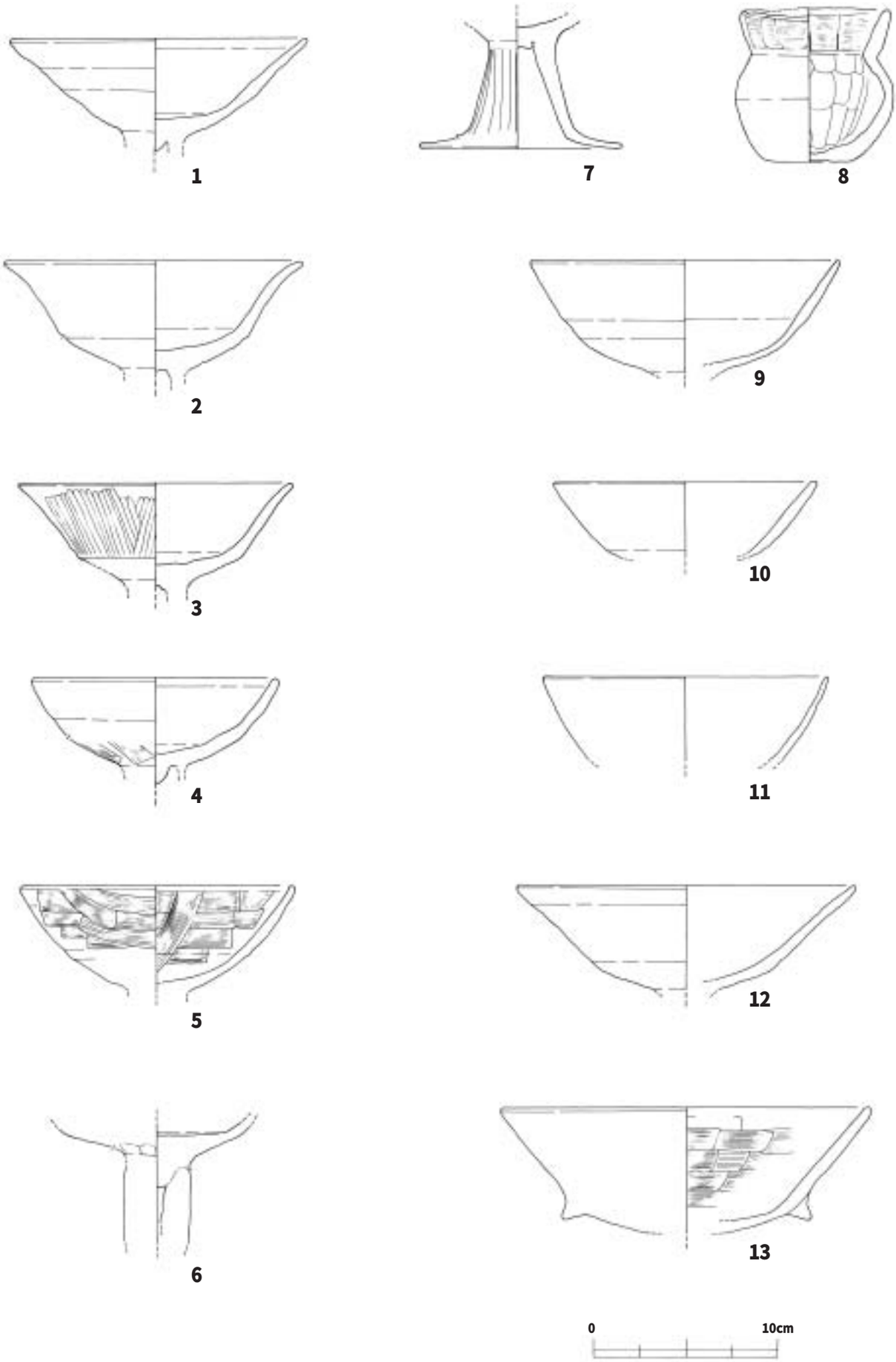


図７　出土遺物実測図（１）

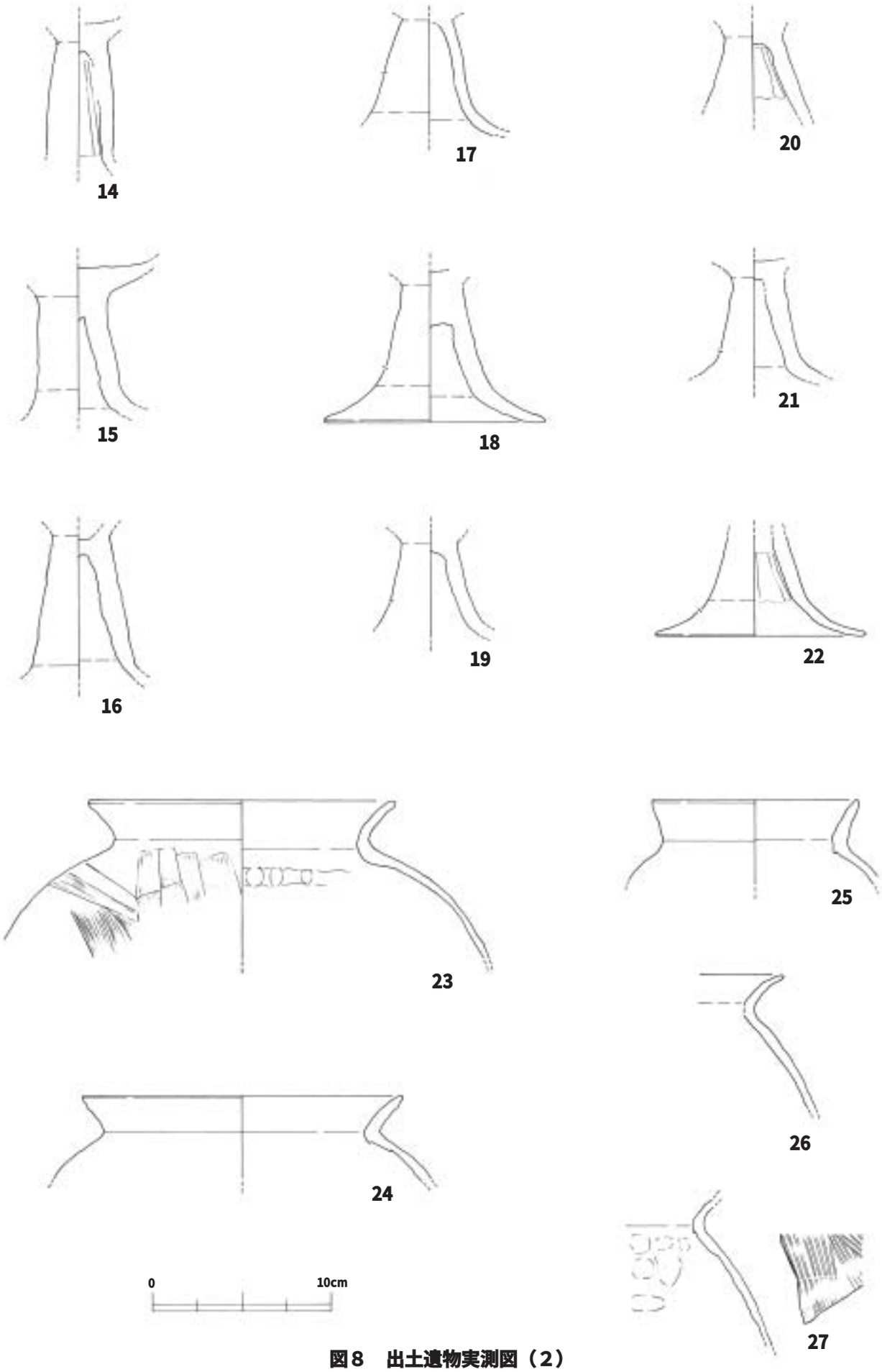


図８　出土遺物実測図（２）

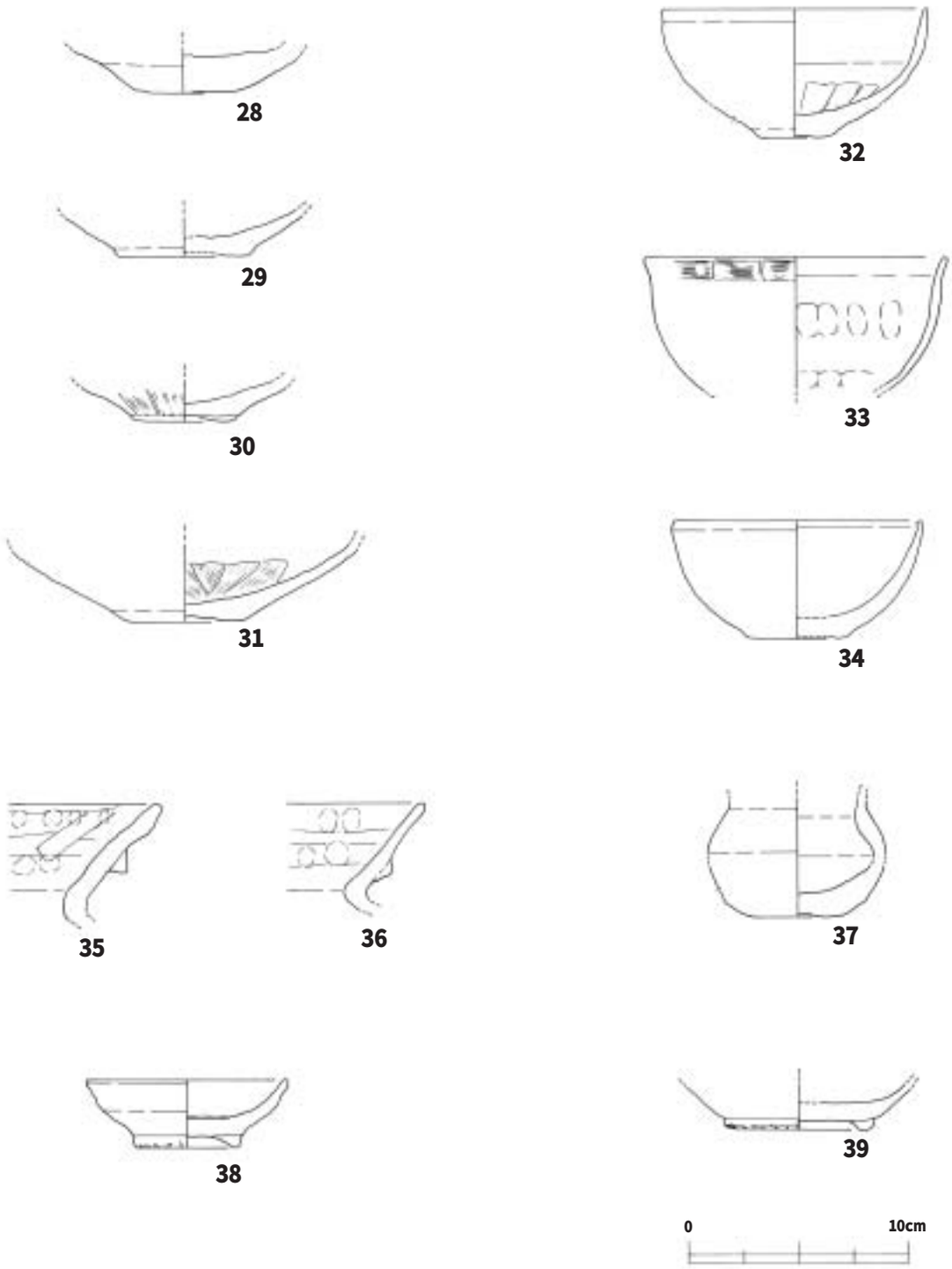


図９　出土遺物実測図（３）

表１　出土遺物観察表

（単位：ｃｍ）

No.	遺物名称	出土位置	法　量　(cm)	色　調	残存率	時　期	調整・特記事項
1	土師器　高坏	No.1	口径15.6、残存高（5.7）	赤褐	45	4C後	調整は全体的に磨耗している。内・外面ともに部分的に黒く焼けている。
2	土師器　高坏	No.4	口径（15.9）、脚基部径（3.2）、残存高（6.3）	黄褐	15	5C前	口縁部外面が一部黒く焼けている。
3	土師器　高坏	No.5	口径14.5、脚基部径3.3、残存高（5.6）	暗黄白	45	5C前	坏部外面へラミガキ、内・外面ともに部分的に黒く焼けている。
4	土師器　高坏	No.7	口径（12.9）、残存高（4.8）	淡褐	―	5C前～中	外面の調整は磨耗している。底部内面に板ナデ調整。
5	土師器　高坏	㉒・㉓	口径14.6、残存高（5.7）	黄褐	20	5C前	坏部内・外面板ナデ調整、内・外面一部黒く焼けている。
6	土師器　高坏	㉒・㉓	脚基部径（3.7）、残存高（6.6）	淡褐	―	5C前	
7	土師器　高坏	No.8	脚端部径（10.7）、脚基部径3.7、残存高（7.0）	黄白	―	5C前	脚部外面へラミガキ。
8	土師器　小型壺	No.2	口径7.9、胴部最大径8.6、底径4.2、器高8.2	淡褐	95	5C後	口縁部内・外面に板ナデ、体部内面は指ナデ調整。
9	土師器　高坏	㉒・㉓・㉔	口径（16.4）、残存高（6.1）	淡褐	20	4C末～5C前	外面が一部黒く焼けている。
10	土師器　高坏	㉔ NR-1上	口径（13.9）、残存高（4.1）	赤褐	―	5C前	調整は全体的に磨耗している。
11	土師器　高坏	㉒・㉓・㉔	口径（15.2）、残存高（4.5）	赤褐	―	5C前	調整は全体的に磨耗している。
12	土師器　高坏	㉒・㉓	口径（18.0）、残存高（5.7）	赤褐	―	5C前	調整は全体的に磨耗している。
13	土師器　高坏	㉒・㉓	口径（19.6）、残存高（6.8）	暗褐	―	5C中	外面は一部黒く焼けている。内面は板ナデ調整。
14	土師器　高坏	㉔	脚基部径（3.8）、残存高（8.1）	淡赤褐	―	4C後	脚部内面にシボリ痕がみられる。
15	土師器　高坏	㉔	脚基部径3.8、残存高（8.8）	暗黄白	―	4C後～5C中	底部内面は板ナデのような調整痕あり。
16	土師器　高坏	表採	脚基部径（3.2）、残存高（8.4）	灰白	―	4C後～5C中	
17	土師器　高坏	⑫	残存高（6.5）	赤褐	―	5C中	
18	土師器　高坏	㉒・㉓	脚端部径（12.0）、脚基部径（3.4）、残存高（8.0）	赤褐	―	5C前～中	調整は全体的に磨耗している。
19	土師器　高坏	㉒・㉓	脚基部径3.3、残存高（5.8）	淡褐	―	5C	
20	土師器　高坏	㉒・㉓	残存高（4.7）	暗黄褐	―	5C	
21	土師器　高坏	表採	脚基部3.0、残存高（6.3）	赤褐	―	5C	調整は全体的に磨耗している。
22	土師器　高坏	㉔	脚端部径（11.4）、残存高（5.6）	赤褐	―	5C後	脚部内面にシボリ痕がみられる。
23	土師器　甕	㉒・㉓・㉔	口径（16.8）、頸基部径（14.2）、残存高（8.8）	暗黄褐	―	5C前	外面に弱いハケ、内面指ナデと指おさえ調整。外面が部分的に黒く焼けている。
24	土師器　甕	⑫	口径（17.6）、残存高（4.9）	暗褐	―	5C後	口縁部外面が一部黒く焼けている。
25	土師器　甕	㉒・㉓	口径（11.4）、残存高（4.7）	黄白	―	4C後	口縁部外面が一部黒く焼けている。
26	土師器　甕	NR-1上 ③	残存高（7.4）	暗黄褐	―	5C前	内・外面が部分的に黒く焼けている。内面に弱い指おさえあり。
27	土師器　甕	㉒・㉓・㉔	残存高（8.2）	黄白	―	―	一部外面が黒く焼けている。内面に指押さえ、外面にハケ目調整あり。
28	土師器　壺か甕	㉔	底径4.5、残存高（2.1）	暗褐	―	―	底部のみ残存。底部内面に調整痕あり。
29	土師器　壺か甕	㉔	底径（5.6）、残存高（2.1）	暗黄白	―	―	底部付近のみ残存。内面は黒く焼けている。
30	土師器　壺か甕	㉔	底径4.6、残存高（1.9）	灰白	―	―	底部付近のみ残存。外面ハケ目調整。外面が一部黒く焼けている。
31	土師器　壺か甕	㉒・㉓	底径5.0、残存高（3.3）	暗黄褐	―	―	底部付近のみ残存。体部～底部内面ハケ目による調整痕あり。
32	土師器　碗	㉒・㉓	口径（12.0）、底径2.8、器高5.9	淡褐	30	5C中	内面にハケ目調整。
33	土師器　鉢	㉒・㉓・㉔	口径（13.6）、残存高（6.1）	暗黄褐	50	5C中	口縁部外面にハケ目調整。体部及び底部内面に指押さえを行う。
34	土師器　鉢	㉒・㉓・㉔	口径（11.1）、残存高（5.3）	暗黄白	40	5C中	内・外面が一部黒く焼けている。
35	土師器 有段口縁壺	㉔	残存高（4.3）	黄白	―	5C中	内面ナデ調整後、指押さえを行う。
36	土師器 有段口縁壺	㉔	残存高（4.8）	黄白	―	5C中	口縁部外面が一部黒く焼けている。内面はナデ調整後、指押さえを行う。
37	土師器　小型壺	③	底径3.8、胴部最大径（8.1）、残存高（5.5）	淡褐	30	4C末～5C前	内面に指ナデの痕跡あり。
38	山茶碗　小皿	表採	口径（9.0）、底径4.5、器高3.1	灰白	45	12C中～後	底部外面回転糸切痕あり。高台に籾殻痕あり。
39	山茶碗　碗	表採	底径（6.0）、残存高（2.1）	灰	―	12C後	底部外面回転糸切痕あり。高台に籾殻痕あり。

（数字）は推定及び復元値

第４節　ま　と　め

集合住宅建設に伴う緊急対応として、建物の建設部分についてのみ発掘作業を行う予定であったが、トレンチ内で検出された自然流路跡（NR）の全容を確認するために、調査区域内で可能な限りの範囲を調査した。

西側に位置する柿田遺跡の事例を鑑みるに、住居跡や水制遺構等の存在が予想されたが、結果として検出できたのは自然流路のみであった。内部から出土した遺物は概ね土師器の破片で、木片等も確認されたが加工を伴うものではなく、流木が流れ込んだものであると考えられる。

出土した土師器を観察し、その時期を4世紀後半から5世紀後半のものと想定すると、柿田遺跡などとの相関性を考慮した上で、この自然流路は古墳時代前半には存在しており、今回の調査では確認することができなかったが周辺に存在したはずの集落跡などに関連した遺構であったと考えられる。

今回の調査では周辺部に人間が生活していた痕跡を確認することができなかったが、ＮＲ内部から一定量の土師器が出土したことから、この調査区の周辺ないしは上流（北東方向）には人間が生活していた空間（集落跡など）がなんらかの形で存在したことが想定される。しかしながら、柿田遺跡や顔戸南遺跡で見られたような堰や護岸といった水制遺構は存在していないことから、隣接した柿田遺跡の内部で確認された流路とは性格を異にするものであった可能性が高い。

調査区の北側に存在する可児川は、東から西へ屈曲しており、過去何度かの氾濫があり、河道も変化しているとされる。今回発見された自然流路はその流れの状態に影響を受けており、最大幅5mに至るその河道は、可児川の支流の一本として、可児川の変化と共に主に南北方向に流れを変えながら存在してきたと想像される。

柿田遺跡、顔戸南遺跡での発掘調査の結果と比較するに、若干の地理的な位置の相違により、人間生活との関連性が大きく異なることは、柿田遺跡周辺の古墳時代前半の状況を考える上で非常に興味深い結果であった。

調査前全景

東西トレンチ土層（南から）

試掘調査作業

東西トレンチ内溝状遺構（南西から）

試掘東西トレンチ（西から）

南北トレンチ（南西から）

東西トレンチ（東から）

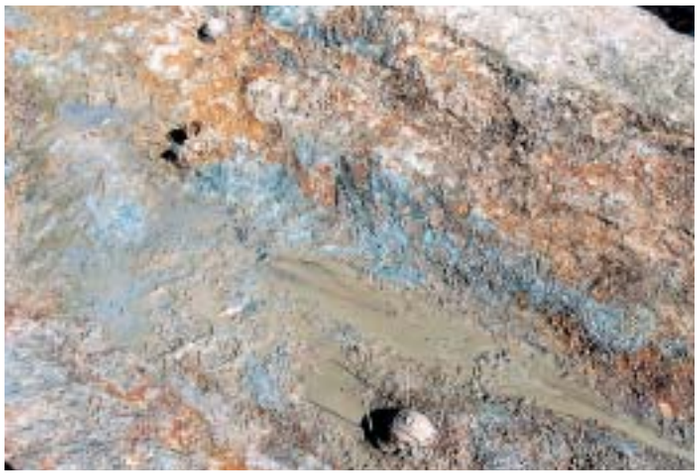
南北トレンチ内土層（北西から）

調査区完掘後（西から）

自然流路全景（西から）

自然流路全景（東から）

自然流路完掘状態（南西から）



自然流路内遺物出土状況
出土地点№１～４（西から）

調査区東端土層（西から）

土層アップ（西から）

流路内土層アップ（東から）

試掘時点での遺物出土状況（西から）

遺物３出土状況（№５地点）

遺物１出土状況（№１地点）

遺物出土状況（№６地点）

遺物８出土状況（№２・３地点）

遺物４出土状況（№７地点）

遺物２出土状況（№４地点）

遺物７出土状況（№８地点）

1-1

3-1

1-2

3-2

2-1

4-1

2-2

4-2

9

7

12

6

5

15

13

16

17

22

18

8

19

23

20

24

26

33

27

37

35

38

36

39

第２章　清水経塚古墳

第１節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

「清水経塚古墳」の発掘調査は、可児市所有の下恵土地内の土地に職員用駐車場を建設する事業に伴うもので、調査区の北側に「清水経塚」（平成7年発掘調査済み）が隣接し、その東側に「可児工業高校南遺跡」の想定される範囲が存在し、その内部に含まれる可能性が高いので、関連した遺跡が検出されると判断し、遺跡の有無や範囲を確認するための試掘調査を行った。期間は平成18年9月7日から8日まで、約20平方メートルの面積を実施した。

対象となった区画内の掘削作業予定部分について、その南端部が既に工事作業を実施した後であった為、工事を一時中断し、掘削済み部分の北側に東西・南北方向のトレンチを設定。重機（バックホー）による荒掘りの後、人力による精査を行っている。

東西トレンチ（幅1.5m×長さ12m）・南北トレンチ（幅1.5m×長さ4.5m）からは明確な遺構は検出されなかったが、東西トレンチの東側及び南北トレンチの内部から、古墳時代の土器を多数含み、近年撹乱を受けていない埋土を伴った地山の落ち込み（遺物包含層）を検出した。また落ち込み以外の場所でも地山面上やその上のある埋土の中から鎌倉・室町時代の山茶碗の破片が出土した。

明確な遺構は確認できなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地である「可児工業高校南遺跡」の範囲内にあると判断して、引き続き本発掘調査へと移行することになった。

調査は、試掘・本発掘調査ともに、吉田正人が担当した。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは以下のとおりである。

事業者発	平成18年9月6日		市教委宛	試掘調査の申請
市教委発	平成18年9月8日		事業者宛	試掘調査の結果報告
市教委発	平成18年9月8日	教文振第116号	県教委宛	発掘調査終了報告書

２．本発掘調査の経緯と経過

試掘調査の結果を受けて、「可児工業南遺跡」の範囲内であると判断したため、遺跡の保存の可能性について担当部署との協議を行ったが、保存を前提とした造成は不可能であるとの結論が出たので、引き続き検出された落ち込みを中心に造成予定範囲内の調査を実施した。期間は平成18年9月11日から22日まで、約120平方メートルの面積を実施した。

対象区画の北側に関して、試掘段階のトレンチ内部の状況を踏まえながら掘削作業を実施。トレンチ内で確認された落ち込みが、南北方向に4～5mの幅で続く溝状の遺構であるとわかった。またその形状が緩やかに円を描いていることから、古墳（円墳）の周溝である可能性が想定された。なお、この調査区の東側には周知の埋蔵文化財「清水経塚」が存在し、平成7年の調査により経塚の基礎となった部分が、もともと古墳の墳丘を利用して、中世墓と一時一石経塚が作られた可能性が高いとの結論を得ている。

そのため、今回の調査で判明したこの遺構は、「清水経塚」の調査の際に想定されていた古墳の周溝であった可能性が高いため、「可児工業高校南遺跡」の一部としていた今までの想定を変更し、改めて「清水経塚古墳」と命名した。また、この周溝内部を掘削したところ、古墳時代前期（4世紀後半）に属する土師器が多数出土し、周辺からは古墳～奈良時代の須恵器片、鎌倉～室町時代の山茶碗片などが出土した。

関係法令等に基づく本発掘調査の諸手続きは以下のとおりである。

事業者発	平成18年9月11日	管第76号	県教委宛	埋蔵文化財発掘の届出
県教委発	平成18年9月29日	社文第237号の30	事業者宛	発掘調査指示の通知
市教委発	平成18年9月15日	教文振第118号	県教委宛	発掘調査着手の報告
県教委発	平成18年9月19日	社文第247号の17	市教委宛	受理の通知
市教委発	平成18年9月22日	教文振第120号	事業者宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成18年9月28日	教文振第121号	県教委宛	発掘調査終了の報告
市教委発	平成18年10月2日	教文振第124号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成18年10月2日	教文振第125号	県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成21年1月9日	教文振第7号の8	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成21年1月19日	社文第12号の33	市教委宛	出土品譲与通知

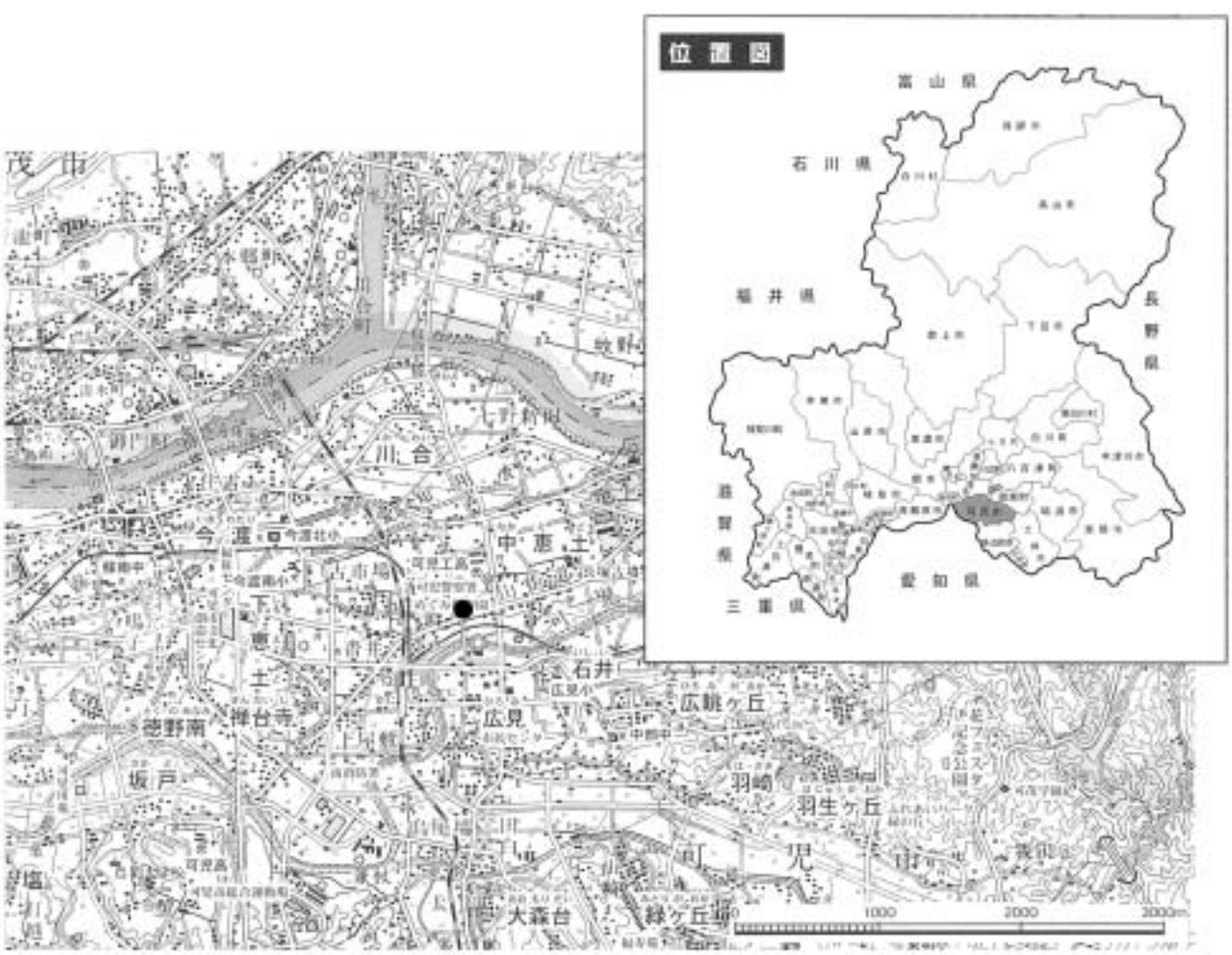
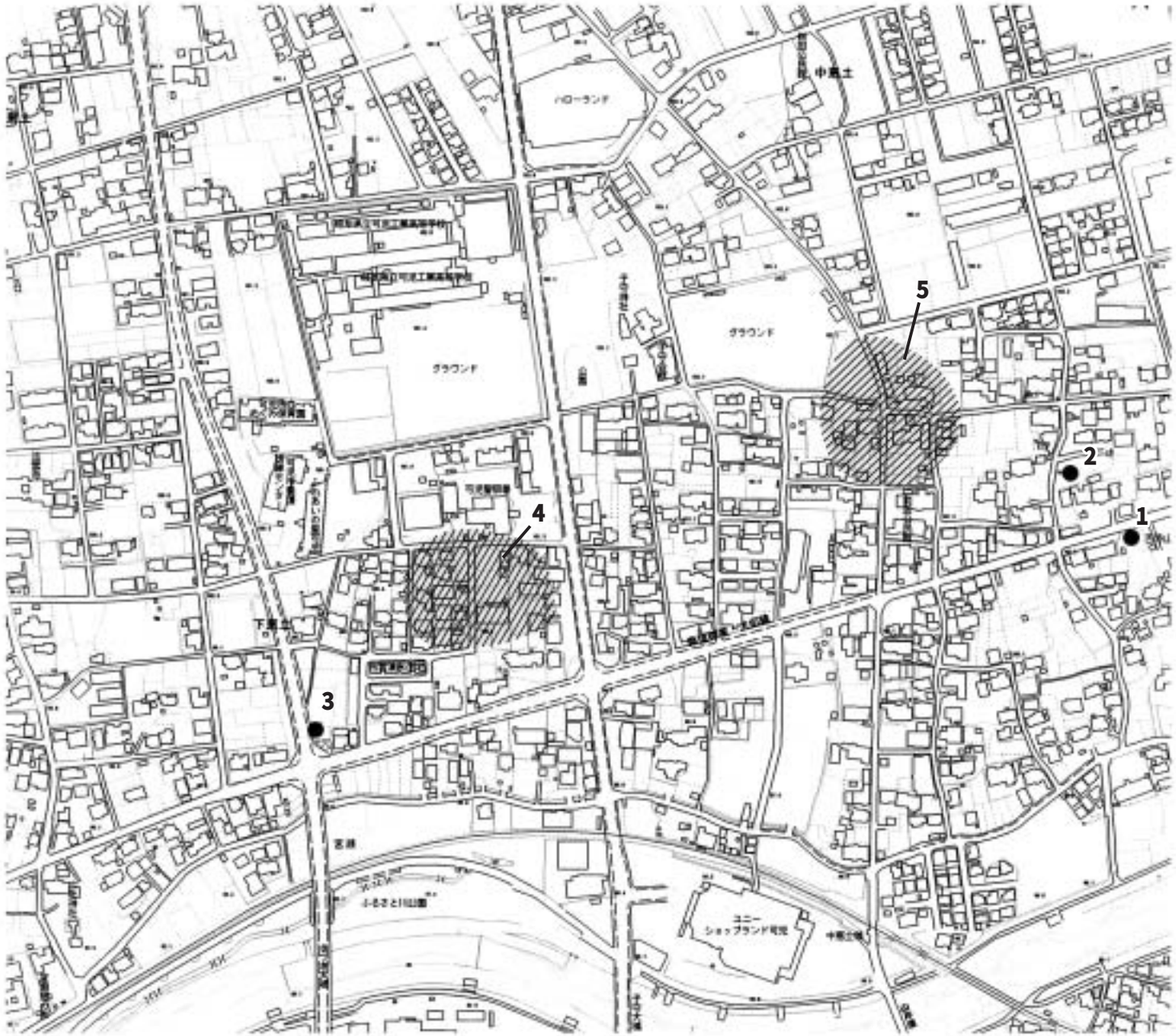


図1　調査場所位置図



1.西寺山古墳
2.野中古墳
3.清水経塚
4.可児工業高校南遺跡
5.中恵土新屋敷遺跡

図２　調査場所及び周辺の遺跡

0　100　200m

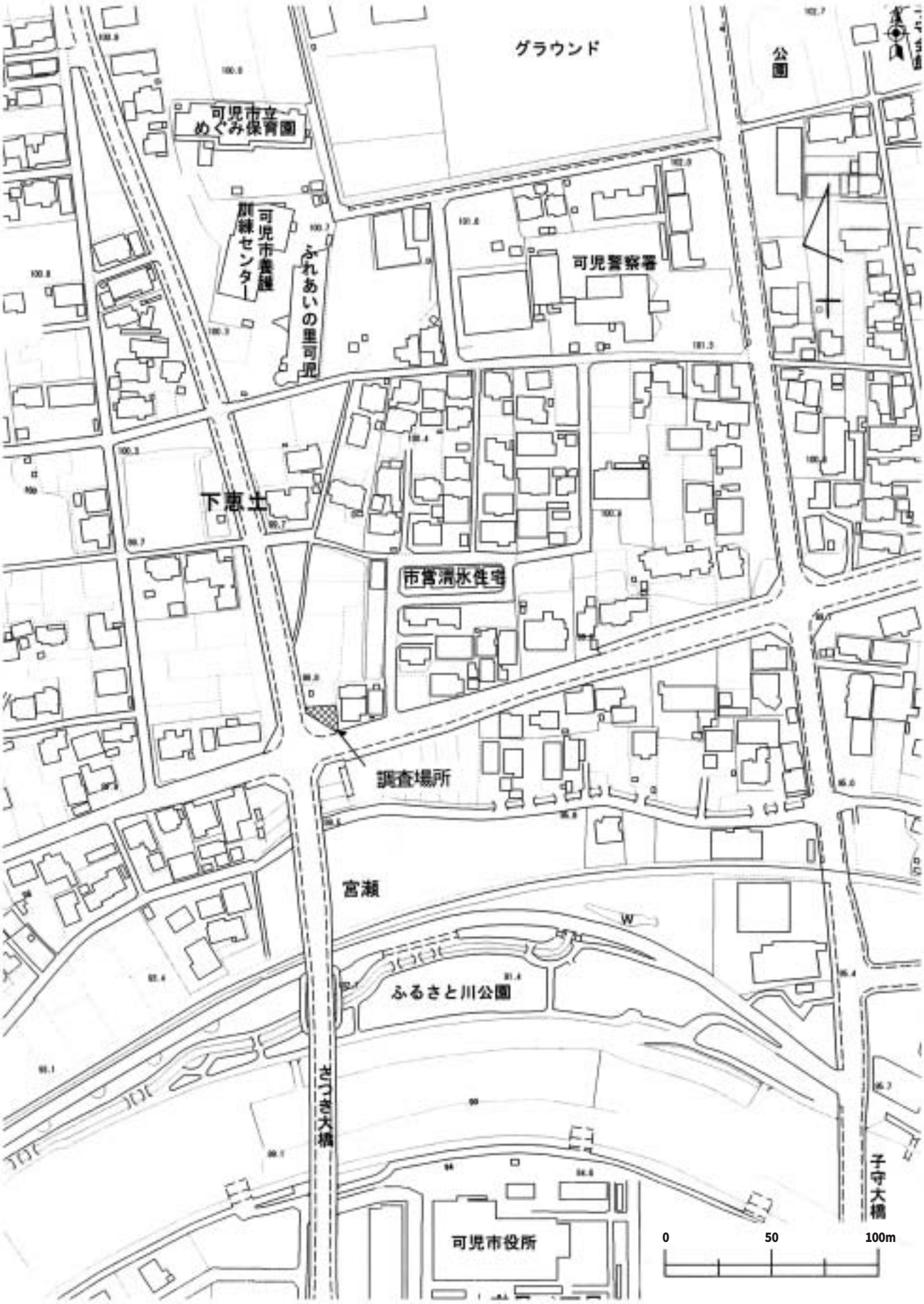


図３　調査場所周辺の地形図

第２節　遺跡の立地と環境

１．立地と環境

可児市のほぼ中央に位置し、木曽川が形成した中位段丘の南端に立地する。周知の埋蔵文化財包蔵地「可児工業高校南遺跡」の想定される範囲の約50m南側には、可児市をほぼ東西に流れる木曽川の支流可児川を見ることができる。

「可児工業高校南遺跡」は、地形が可児川に向かって傾斜するその起点に位置する。可児川との比高は約10m、標高は約100mである。

遺跡の東側には、国指定史跡長塚古墳を含む「前波の三ツ塚」があり、古墳時代前期の首長墳として認識されている。また同時代の集落跡として「欠ノ上遺跡」などが存在する。

今回の調査を行った区域のすぐ北側には、「清水経塚」と呼ばれる遺跡が存在した。平成7年市道建設に伴う緊急発掘調査が行われた結果、多数の蔵骨器を伴う中世墓群と江戸時代後期の一字一石経塚が確認された。また残存していたマウンドの土の盛り方から、この遺跡が元々は古墳の残丘であったことが判明した。

参考文献　可児町教育委員会　『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』　1979
可児市教育委員会　『清水経塚』　1999
可児市教育委員会　『前波の三ツ塚』　1999
可児市　『可児市史』第１巻　通史編　考古・文化財　2005

第３節　遺構と遺物

１．層　序

「清水経塚」を発掘した平成7年当時、古墳の墳丘と思われていたマウンドの残存部及びその周辺は竹林や畑であり、加えて周辺には民家が立ち並ぶ状況であった。今回調査の対象になった土地は、工事開始前には休耕地となっており、ほぼ平らな状態であった。

図5の土層図でみると、上段のE－E’（調査区の北壁）については、①（⑪の含む）の淡茶褐色土が表土であり、⑭は現代の瓦を含むなど穴を埋め戻した部分と思われる。②～⑨、⑮は周溝（SD）の埋土で、試掘の段階では後世撹乱は受けておらず、古墳時代以降の遺物を多数含んでいた。⑯は地山で、黄褐色粘質土でよくしまった固い土である。

図5の下段F－F’では、南に向かって広がるSDの状況が確認できる。この図に関しては、①と②が表土である。③～⑰はSDの埋土、④～⑧の下層部分では遺物（土師器）と共に小石、小礫が多数混じる。また、全体としてSD埋土内の堆積層には地山粒子やブロックが混じる傾向があった。

２．遺　構

駐車場建設のための工事が先行しており、事業予定地内の南半部についてはすでに掘削作

業が行われていた。そのためすでに掘削された部分から状況を観察すると共に、その北側に東西方向のトレンチを設定した。（図版1）

この時点で確実に遺跡と思われる痕跡は確認できなかったが、南北・東西のトレンチ内部に、共に古墳時代前半と思われる遺物を多数含み、近年の撹乱を受けていない埋土を伴った地山（黄褐色）の落ち込み（遺物包含層と思われる）を検出した。このほかにも地山面上などから鎌倉・室町時代の山茶碗の破片が出土したことから、「可児工業南遺跡」の範囲であるとの予測の元に、事業者側と協議を行い、本調査へ移行した。（図版1）

調査区内全体の表土を掘削し、地山面まで降ろすと、試掘段階で検出した地山の落ち込みが南北方向に調査区全体を横切っていることが判明。落ち込みは緩やかなカーブを描いて西へ曲がっており、ちょうど円形を4分の1にしたような形をしていた。（図4）

そこで周りの掘削と平行して、落ち込み内部についても掘削作業を進めたところ、最大幅5m、最深部で約1mの溝状の遺構であった。これは北側にあった清水経塚の調査時にその存在が確認された古墳の周溝の一部であると考えられる。

掘削作業を続けると、周溝東側の肩の部分から切りあい関係にあるピットが2ヶ所検出され、周溝底部からは直径15cmほどの小さなピットが6ヶ所で見つかった。（図4）周溝内部の埋土及びその底部からは、古墳時代前半と思われる土師器を中心に多数の遺物が出土しており、この場所に古墳時代前半の円墳があった可能性が高い。

また、東西に分けられた2つの地山面上には、西側に3ヶ所、東側に1ヶ所の計4つの土坑（ＳＫ）が検出された。西側に関しては形や大きさから考えても用途が判然としなかったが、東側にある土坑（ＳＫ1）に関しては、その大きさ（長さ約3m、幅約1mの長方形）や縦軸がほぼ南北方向に向いていることから、清水経塚の調査でも見られた中世の土坑墓ではないかと考えられる。

なお、周溝西側については、元々古墳の墳丘があったと想定される場所であるが、今回の調査で墳丘の盛土が完全に削り取られていることが確認された。これは北側にあった「清水経塚」の調査時にもある程度判明していたことで、マウンド状の遺構は残されていたが、すでに墳丘は削り取られており、その上に蔵骨器を伴う中世墓群や一字一石経塚（江戸時代末）が作られていた。今回確認された部分についても、盛土は無くなっており、地山面に土坑が掘り込まれていることや地山直上の層から須恵器や山茶碗などが出土していることから、古代から中世にかけてのいずれかの時期に、墳丘が削平されたと考えられる。

調査開始当初、「可児工業高校南遺跡」の一部であるとの観測で作業を進めていたが、実際には「清水経塚」に関連した遺構であることが判明したので、周溝及び墳丘の跡については、「清水経塚古墳」と新たに名付けることとする。

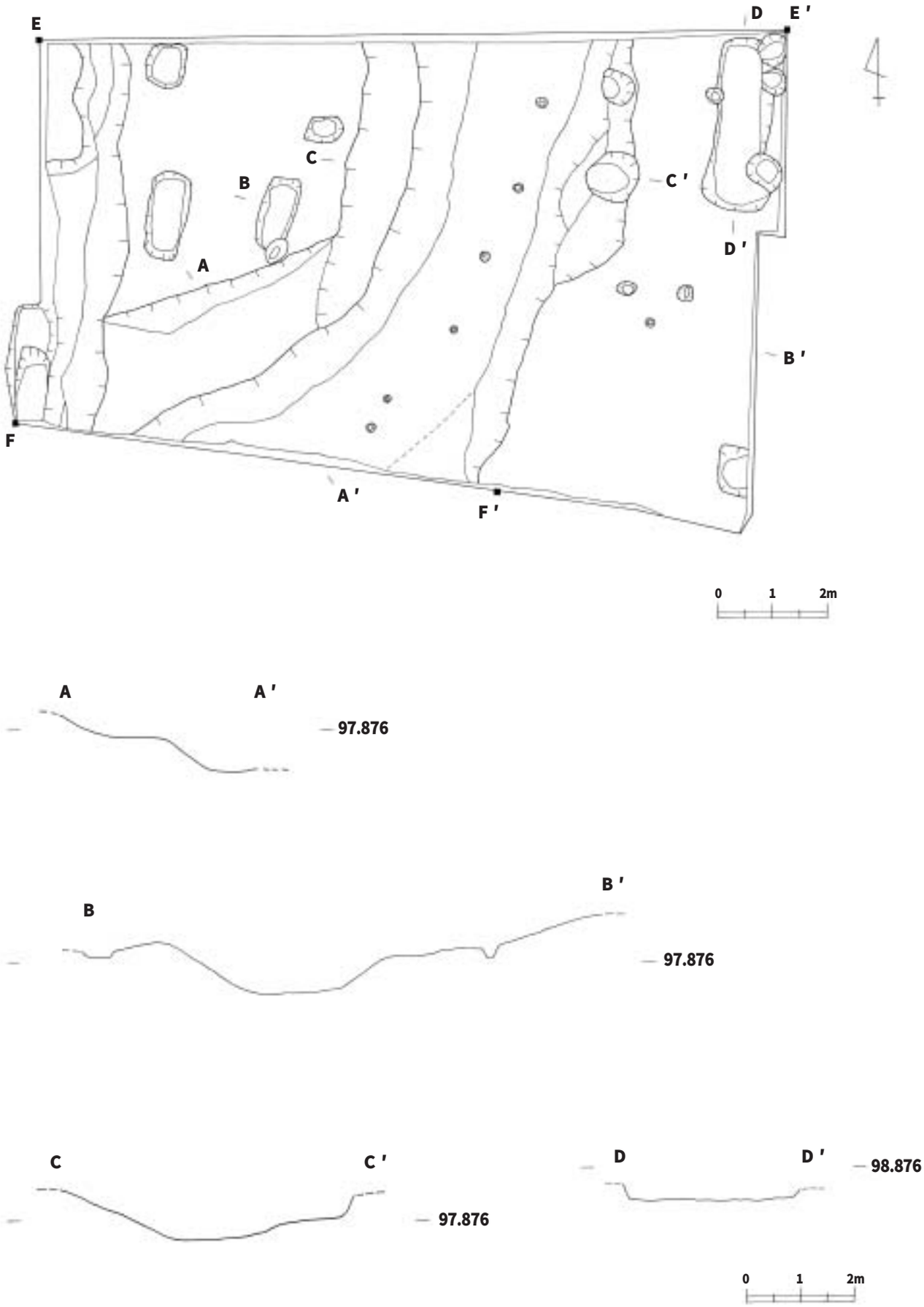
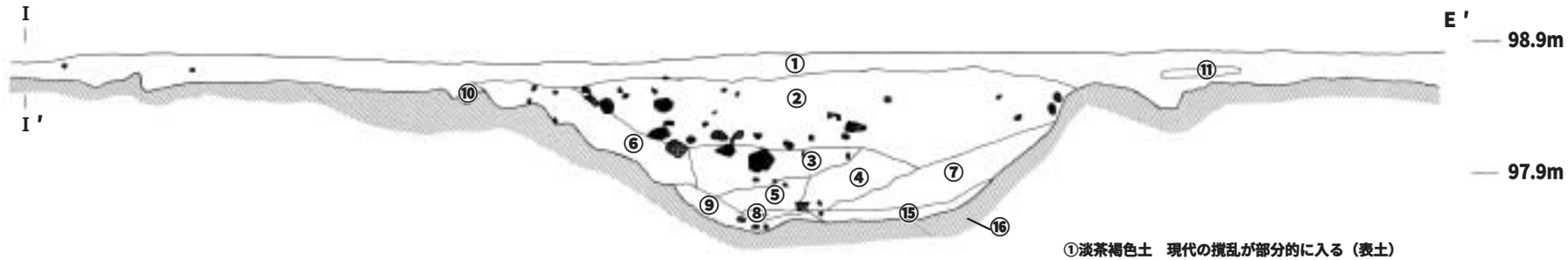
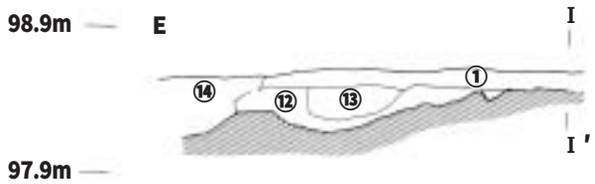
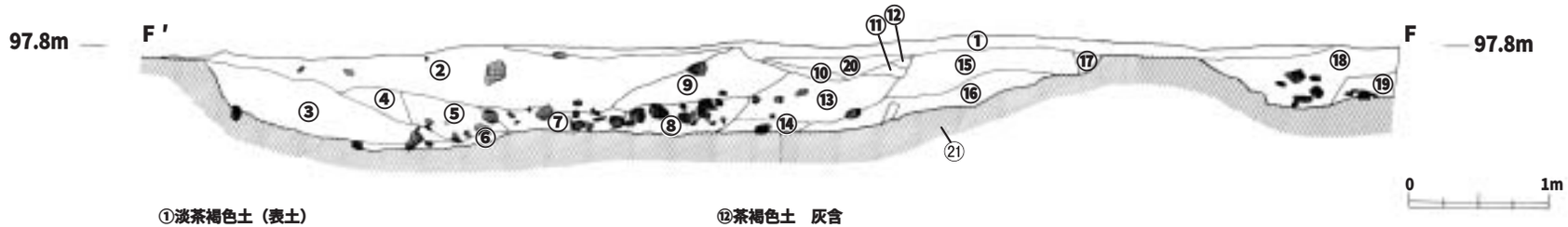


図４　調査区遺構実測図及び断面図



①淡茶褐色土　現代の撹乱が部分的に入る（表土）
②茶褐色土　地山粒子含　よくしまる
③黒褐色土　地山粒子含　土器含　よくしまる
④淡茶褐色土　地山粒子・ブロック含　よくしまる
⑤暗茶褐色土　よくしまる
⑥茶褐色土　黒褐色土・黄色土・混合土・黄色粒子含　よくしまる
⑦暗黄土色土　地山粒子・ブロック多含　土器含　よくしまる
⑧灰褐色粘質土　土器多含
⑨暗黄土色土　地山粒子・黄色粒子多含　土器含　よくしまる
⑩暗茶褐色土　地山粒子多含　よくしまる
⑪燃えた灰
⑫淡褐色土　地山粒子多含　地山ブロック含　よくしまる
⑬燃えた灰
⑭灰茶褐色土　現代の瓦多含
⑮黄褐色土　暗褐色土がまばらに混じる　非常に固い
⑯黄褐色粘質土　固い　よくしまる（地山）





①淡茶褐色土（表土）
②淡茶褐色土　地山粒子・ブロック含　よくしまる
③暗茶褐色土　よくしまる
④暗黄土色土　地山粒子含む　黄色土混じる　よくしまる
⑤茶褐色土　地山粒子・小ブロック含　よくしまる
⑥灰褐色粘質土　地山粒子含　土器含
⑦黒褐色土　土器含
⑧淡茶褐色粘質土　土器多含
⑨褐色土　地山粒子含
⑩燃えた灰
⑪燃えた灰
⑫茶褐色土　灰含
⑬暗茶褐色土　地山粒子含　よくしまる
⑭灰褐色粘質土　地山粒子含　土器含
⑮茶褐色土　よくしまる
⑯暗黄褐色土に暗褐色土がブロック状に入る
⑰黄土色土に暗茶褐色土がまばらに混じる　よくしまる
⑱黄褐色土　黄土色土・地山粒子含む（新しい溝の下土）　よくしまる
⑲淡茶褐色土　地山粒子・炭ブロック多含む（ＳＫの下土）　よくしまる
⑳茶褐色土　地山粒子多含（埋めた部分）
㉑黄褐色粘質土　固い　よくしまる（地山）

図５　調査区内土層図

３．遺　物

周溝跡（SD）の内部からは、土師器を中心に多くの遺物が出土した。ただ破片が多く、器形を復元することができたものはその一部である。

調査区全体で出土した遺物は1,000点を超えるが、そのうち3割程度は器形も特定できない小さな破片である。また出土した遺物のうち土師器が8割近くを占める。その他は須恵器が30点（坏、壺、甕、甑など）、山茶碗・白瓷・施釉陶器などが167点で、表採である近現代の陶磁器類が16点ある。

今回の調査で出土した遺物の中心は土師器であるが、その大半は周溝跡（ＳＤ）の内部から出土している。試掘段階で確認されたＳＤの状況は、近年の撹乱を全く受けていない状態であった。ＳＤの内部については、掘削作業時に北側から南に向かってＳ1～Ｓ5の区画に分けて取り上げ作業を行った（遺物観察表の出土位置参考）。

図化可能な程度に復元できた遺物は23点。高坏の坏部（図6の1、2）、脚部（図6の3～6）など、時期は最も古いもので高坏脚部（図6の3）の3世紀末（廻間Ⅱ式第3・4段階、川合遺跡群前Ⅰ期）で、図6の1、2、4は4世紀中～後半（廻間Ⅲ式第3・4段階、川合遺跡群前Ⅲ期）である。

甕は体部と思われる破片が多く、出土した遺物の中でも多くを占める。口縁部に関しては「Ｓ字状口縁」のものが「く字状口縁」のものより多い（図6の9～11）。7の甕は口径9.8cm、胴部最大径10.6cm、器高10.4cm、時期は3世紀末（廻間Ⅱ式第3・4段階、川合遺跡群前Ⅰ期）、9～11のＳ字状口縁は、4世紀中～後半（廻間Ⅲ式第3・4段階、川合遺跡群前Ⅲ期）で、頸部から体部にかけてきれいにハケ目が残っている。

甕については底部も出土しており、図6の12～14は台付甕の底部（台部分）で、12は高台径9.4cm、残存高4.8cm、13は高台径6.9cm、残存高4.3cm、14は高台径8cm、残存高5.3cmで、共に時期は3世紀末（廻間Ⅱ式第3・4段階、川合遺跡群前Ⅰ期）である。この他に平底、丸底の一部と思われる破片も数点出土している。

出土した壺の中で、図6の15は比較的残りが良く、全体が確認できる状態である。口径16.0cm、胴部最大径23.4cm、底径4.8cm、器高28.0cmと大型で、やや外反しながら垂直に立ち上がる口縁部、大きく丸く膨らんだ胴部で、外面と口縁部の内面にヘラミガキが見られる。時期は４世紀後半（松河戸Ⅰ式、川合遺跡群前Ⅳ期）と思われる。

また図7の16～18は二重口縁の壺で、特に17は口縁部～頸部と胴部が分かれているものも、全体像を観察することができる。口径22.8cm、残存高13.3cmであるが胴部と合わせると大きな個体となる。表面の調整は摩滅しており確認することはできなかった。（他の遺物でも表面の状態が確認できないほど磨耗した状態の破片が多く見られた。）この遺物の時期は4世紀後半（松河戸Ⅰ式、川合遺跡群前Ⅳ期）と思われる。

このほかに鉢が出土しているが、台付の鉢（図7の22）なども見られた。時期は概ね4世紀内と思われる。またＳＤ内では打製石器と一部と思われる平らに加工された石器（3.7×3.6のほぼ正方形）も出土している。

出土遺物全体を見るに、一部に若干古い（3世紀末頃と想定できるもの）遺物が混じっているが、その大半が4世紀中から後半にかけての遺物といえる。特にＳＤ内部の土師器は4世紀代のものがほとんどで、ＳＤ自体の時代設定は古墳時代前期末から中期と言える。

参考文献

可児市教育委員会　『川合遺跡群』　1994
可児市　『可児市史』第1巻　通史編　考古・文化財　2005
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『廻間遺跡』　1990
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『松河戸遺跡』　1994
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『志賀公園遺跡』　2001
赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』
第2号　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　2001
財団法人岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005
各務原市教育委員会　『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』　1984

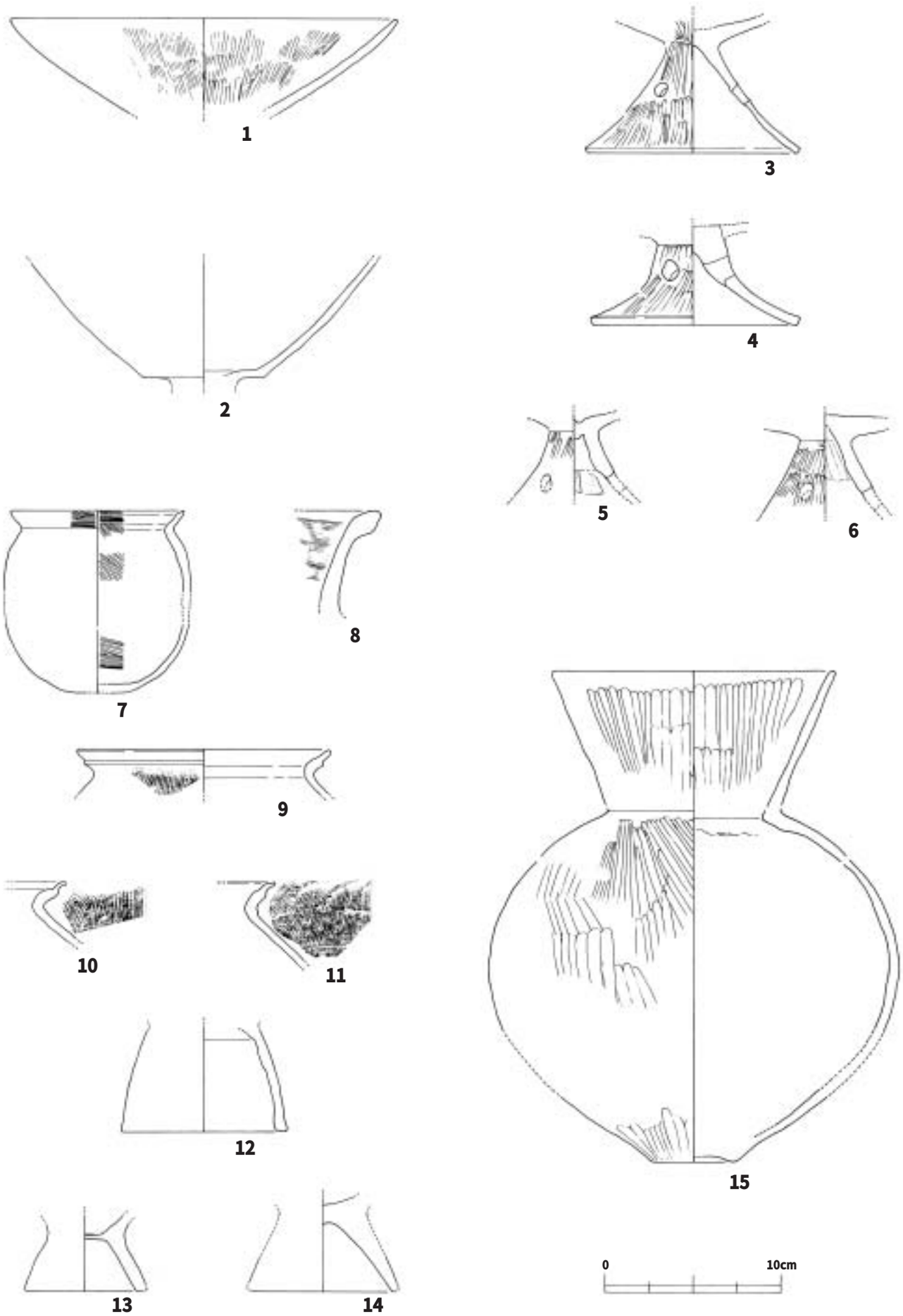


図６　出土遺物実測図（１）

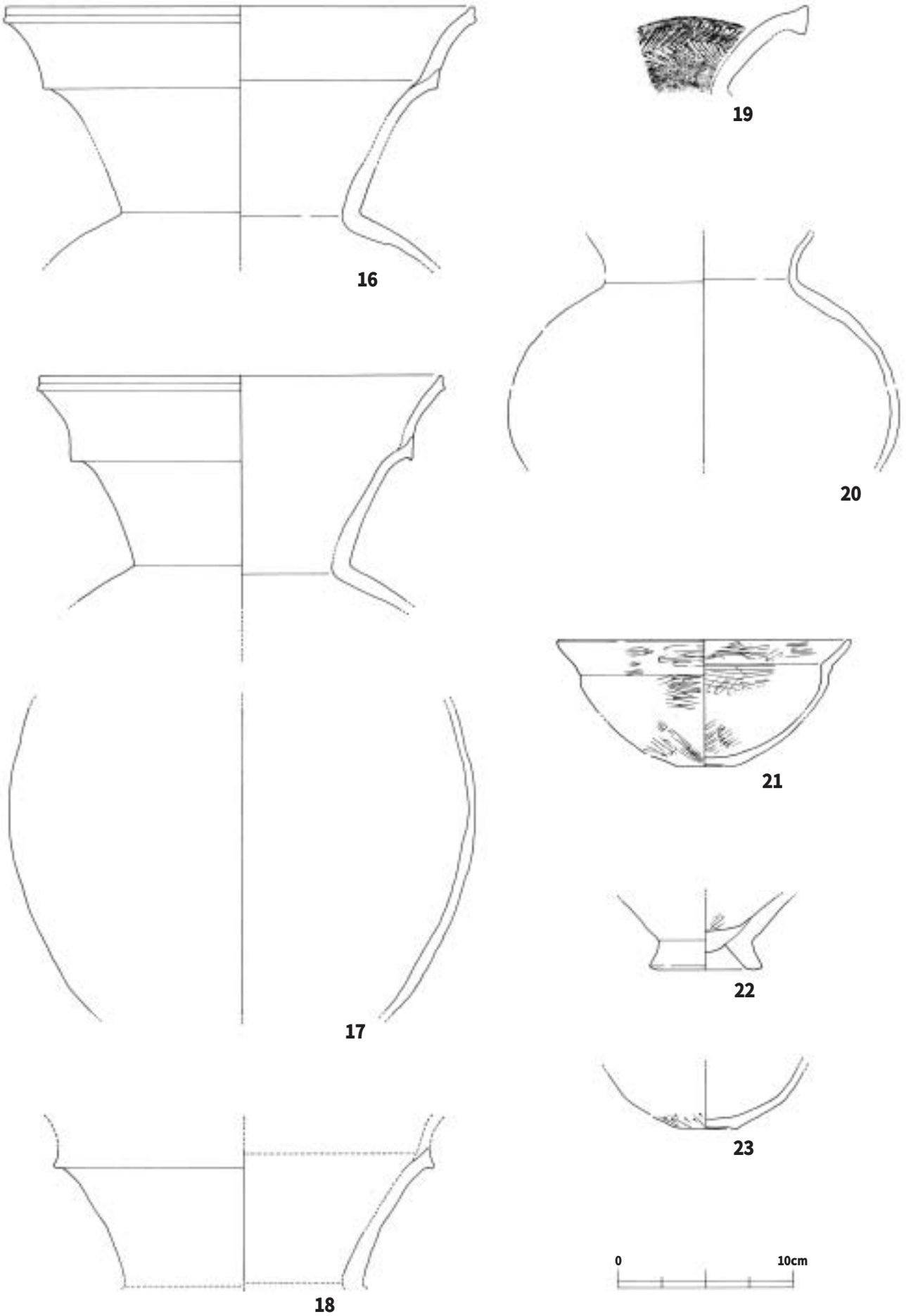


図７　出土遺物実測図（２）

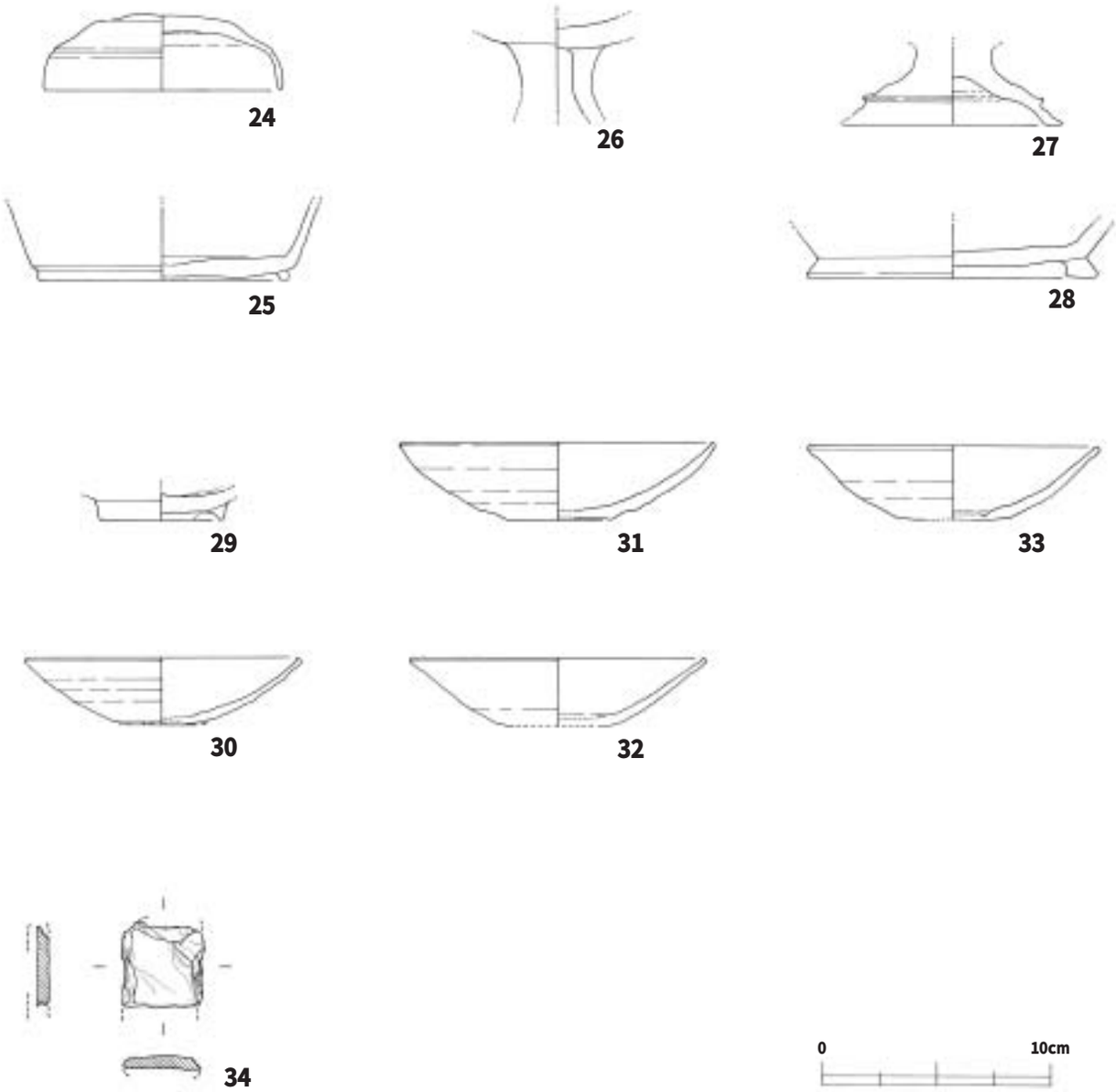


図８　出土遺物実測図（３）

表１　出土遺物観察表

（単位：ｃｍ）

No.	遺物名称	出土位置	法　量　(cm)	色　調	残存率	時　期	調整・特記事項
1	土師器　高坏	1T、E、SD-S3、SD-S5	口径（22.0）、残存高（5.4）	褐	20	4C後	内外面にヘラミガキ、一部外面が黒く焼ける
2	土師器　高坏	SD	脚基部径（4.0）、残存高（7.0）	黄白	―	4C後	
3	土師器　高坏	SD-S3 SD-S4	高台径12.2、残存高（7.7）、脚基部径3.1	暗褐	20	3C末	外面ヘラミガキ。
4	土師器　高坏	SD-S2	高台径（11.6）、残存高（6.7）、脚基部径3.8	黄褐	15	4C中	外面はヘラミガキ、坏部がはずれた痕跡がみられる。
5	土師器　高坏	SD-S2	脚基部径2.8、残存高（4.7）	黄褐	―	―	内面板ナデ、外面ヘラミガキ。脚部内面にシボリ痕あり。
6	土師器　高坏	SD-S5	脚基部径3.0、残存高（5.6）	褐	―	―	外面ヘラミガキ。脚部内面にシボリ痕あり。
7	土師器　甕	SD、SD-S3、SD-S5	口径（9.8）、頸基部径（8.6）、胴部最大径（10.6）、器高（10.4）	暗褐	18	3C末	内外面ハケ目
8	土師器　甕	SD、SD-S5	残存高（5.8）	褐	―	―	内面板ナデ。8世紀の須恵器の模倣品か？
9	土師器　甕	SD-S3	口径（14.2）、残存高（3.0）	暗褐	―	4C中～後	S字状口縁甕。頸部～体部にかけてハケ調整。
10	土師器　甕	SD-S4	残存高（3.5）	暗褐	―	4C中～後	S字状口縁甕。頸部～体部にかけてハケ調整。
11	土師器　甕	SD-S4	残存高（4.7）	暗褐	―	4C中～後	S字状口縁甕。頸部～体部にかけてハケ調整。
12	土師器 台付甕	SD、SD-S2、SD-S4	高台径（9.4）、残存高（4.8）	暗褐	―	3C末	
13	土師器 台付甕	SD-S3	高台径（6.9）、残存高（4.3）	黄褐	―	3C末	台部内面に底部と貼り付けた痕跡がみられる。
14	土師器 台付甕	SD-S4	高台径（8.0）、残存高（5.3）	褐	―	3C末	台部内面に底部と貼り付けた痕跡がみられる。
15	土師器　壺	SD-S3 SD-S4	口径（16.0）、胴部最大径(23.4)、底径4.8、器高28.0	黄白	30	4C後	外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ
16	土師器 二重口縁壺	SD-S4 SD-S5	口径（26.6）、頸基部径（13.6）、残存高（14.6）	赤褐	―	4C後	調整は全体的に磨滅している。
17	土師器 二重口縁壺	SD-S2 SD-S3	口径（22.8）、頸基部径（11.4）、残存高（13.3）	黄褐	―	4C後	調整は全体的に磨耗している。同一個体と思われる体部片あり。
18	土師器 二重口縁壺	SD-S1	残存高（7.4）	赤褐	―	―	調整は全体的に磨耗している。
19	土師器　壺	SD-S2	残存高（4.7）	黄白	―	4C後	口縁部内面に羽状文。
20	土師器　壺	表採	頸基部径（11.0）、胴部最大径22.3、残存高（12.9）	灰	―	―	外面が一部黒く焼ける。調整は全体的に磨耗している。
21	土師器　鉢	SD-S4	口径（16.5）、底径3.0、器高（7.2）	暗褐	15	4C前	内外面にヘラミガキ、底部外面に静止ヘラケズリ調整。
22	土師器 台付鉢	SD-S4	高台径（5.6）、残存高（4.1）	黄褐	―	4C後～5C初	底部充填に際し、板ナデを施す。
23	土師器　鉢	SD-S4	底部径3.4、残存高（3.5）	淡黄褐	―	―	底部外面ケズリ。壺の底部の可能性もあり。
24	須恵器　坏蓋	SD	口径（10.4）、器高3.4	灰	30	7C前	天井部外面回転ヘラケズリ後、頂上部静止ヘラケズリ。
25	須恵器　坏身	東表土	高台径（11.0）、残存高（3.2）	灰白	10	8C前～中	底部外面静止ヘラケズリ。
26	須恵器　高坏	SD	脚基部径4.1、残存高（4.1）	灰	―	7C後	
27	須恵器 台付長頸瓶	SD	脚端部径9.8、残存高（3.4）	灰白	―	7C前	
28	瓶類	表採	高台径12.4、残存高（2.4）	灰	―	8C中～後	底部内面に指押さえが多くみられ、底部～体部外面は回転ヘラケズリ。
29	白瓷 皿の底部	表採	高台径5.6、残存高（1.3）	灰白	―	11C前～中	底部外面回転糸切痕あり。
30	山茶碗　碗	表採	口径（11.8）、高台径（3.7）、器高2.9	灰白	50	15C前	底部外面回転糸切痕あり。
31	山茶碗　碗	表採	口径（13.6）、底径（4.6）、器高3.4	灰白	40	15C中	底部外面回転糸切痕あり。
32	山茶碗　碗	表採	口径（12.8）、底径（5.0）、器高3.0	灰白	15	15C中	底部外面回転糸切痕あり。
33	山茶碗　碗	表採	口径（12.5）、底径（4.8）、器高3.3	灰白	15	15C中	底部外面回転糸切痕あり。
34	打製石斧	SD	長さ（3.7）、幅（3.6）、厚さ（0.5）	青灰	―	―	欠損している。

（数字）は推定及び復元値

第４節　ま　と　め

まず第1の成果は、「清水経塚」を発掘調査した際に積み残された形になったかつての古墳の状況を明らかにするための材料が1つ増えたということである。

調査の結果判明した古墳の状況は、「清水経塚」の調査の時点と同様に完全に墳丘が削平されていたが、その代わり明確な形で周溝が残されていたことがわかったことで、元々の墳丘の形状についてもそれを推量することが可能となった。

残存していた周溝跡だけでも幅5mを計ることから、直径20mはゆうに超える規模の円墳がこの場所に存在したと言える。さらに周溝内から多量に出土した土師器片により、古墳時代前期から中期にかけての遺跡であることも確認することができた。ただ残念なことに古墳そのものの副葬品と思われる遺物の出土は無く、古墳の被葬者については、それを推測する材料を得ることはできなかった。

「清水経塚古墳」の東には、国指定史跡長塚古墳を含む「前波の三ツ塚」と呼ばれる3つの大型古墳が存在する。またさらに東側には御嶽町伏見地区に「伏見古墳群」が存在し、古墳時代前期の首長墓として6基もの前方後円墳が存在し、その周辺部（東、西、南の三方）に築造された円墳が数多く見られる。

現在は「長塚古墳」、「西寺山古墳」などの主要なもの以外はそのほとんどが滅失しているが、その存在が明らかとなった「清水経塚古墳」に関しては、それらと同時代の古墳時代前期から中期にかけての墳墓として位置づけられるはずである。

今回の調査は駐車場建設に伴うもので、出土した遺構自体を保存することはできなかったが、長く撹乱を受けること無く、地中に埋もれていた遺構を発見できたことで、古墳時代前期から中期にかけての中恵土、下恵土地区の状況の一端を明らかにできたことは、非常に意義ある成果を得ることができた。

今後「可児工業高校南遺跡」などについても調査を行う機会があれば、御嶽町伏見地区から可児市前波地区にかけての木曽川中流域左岸一帯について、地域の中核として発展した時代の様相を明らかにすることが可能であると考えられる。

試掘時遺構（南から）

南北トレンチ（東から）

南北トレンチ土層（西から）

南北トレンチ（北から）

調査区全景（南東から）

墳丘跡（南東から）

墳丘及び周溝（北東から）

周溝及び北側断面（南東より）

周溝完掘状態（南東から）

調査区北壁周溝断面（南から）

墳丘跡及び周溝（北西から）

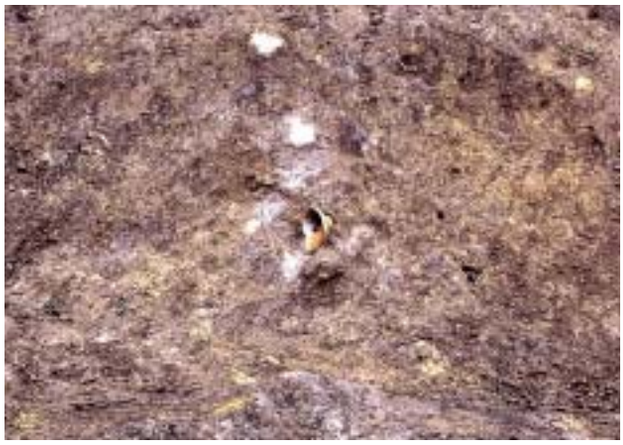
調査区南壁周溝断面（北から）

南壁土層（北から）

調査区東側（北西から）

南壁土層（北から）

調査区東側の中世土壙跡（南から）



周溝内遺物出土状況（南から）

中世土壙跡アップ（北から）

周溝内土師器出土状況（南から）

1

5

2

6

3

7

4

8

9

15

10

19-1

11

19-2

13

16

17-1

21

17-2

22

18

23

20

34

24

30

25

31

26

32

28

27

報　告　書　抄　録

ふ り が な	かきだつきたいせき・しみずきょうづかこふん
書　　名	柿田月田遺跡・清水経塚古墳
副 書 名	
巻　　名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	41
編 集 者 名	松本　茂生
編 集 機 関	可児市教育委員会
所　在　地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地 名	コ ー ド 市町村	コ ー ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面　積	調 査 原 因
かきだつきたいせき 柿田月田遺跡	かにしかきだあざつきた 可児市柿田字月田 501番5	21214	11935	35° 25' 51.3"	137° 06' 21.1"	20060327 ～ 20060403 255㎡	アパート建設
しみずきょうづかこふん 清水経塚古墳 （かにこうぎょうこう 可児工業高 こうみなみいせき 校南遺跡）	かにししもえどあざ 可児市下恵土字 しみず 清水49番2外3筆	21214	07496	35° 25' 42.1"	137° 03' 36.5"	20060907 ～ 20060922 140㎡	駐車場造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
柿田月田遺跡	その他	古墳	自然流路跡	土師器、須恵器、 山茶碗	可児川の支流と考えられる自然流路跡。古墳時代前半の遺物が出土。
清水経塚古墳	古墳 集落跡	古墳 奈良 中世	古墳と周溝 集落跡 散布地	土師器、須恵器、 山茶碗	古墳時代前半の古墳の墳丘跡と周溝。

可児市埋文報告 41

柿田月田遺跡・清水経塚古墳

平成 21 年 3 月 28 日　印刷
平成 21 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒 509-0292　岐阜県可児市広見一丁目 1 番地
Tel 0574-62-1111　Fax 0574-63-6751

印　　刷　丸理印刷株式会社